北草研報30: 11－28 (1996)

## 北海道草地研究会創立30周年記念シンポジウム

# 北海道の草地と文化

1995年12月4日　北海道大学学術交流会館で行われた北海道草地研究会創立30周年記念シンポジウム「北海道の草地と文化」—豊かな文化を育む草地をめざして—　の講演会およびシンポジウムの内容を以下に記した。

| 演題 | 講演者 |
|---|---|
| 森林と草原の間 | 高畑　滋 氏（草地研究者） |
| 私の目に映る北海道の草地と自然 | 加藤幸子 氏（小説家） |
| 農業と自然環境 | 竹田津実 氏（写真家） |
| 風土に生かされた家族農業 | 小出清信 氏（酪農家） |

**司会**

島本義也 氏（北大）・福永和夫 氏（帯畜大）

**落合**

ただ今より「北海道草地研究会30周年記念シンポジウム」を開催いたしたいと思います。まず最初に、北海道草地研究会会長の長谷川寿保よりご挨拶いたします。

**長谷川**

会長の長谷川でございます。北海道草地研究会30周年を迎えるにあたりまして、今回の記念シンポジウムの「北海道の草地と文化、副題に豊かな文化を育む草地を目指して」というようなことを企画いたしましたところ、多数ご参加いただきまして、大変嬉しく思っております。シンポジウムの主旨につきましてはこのしおりの中にも書いてございますけれども、古くから農業や牧畜が土地を媒介にして発達して参った訳であります。これらを取り巻く自然との関わりという中で、それぞれ目指した文化、つまり、単に食料の生産という以外にも農業の発達にとって必要なこの自然を恐れたり、恵みに感謝をしたり、といったような人間に必要な精神的な面を含めた文化が発達形成されてきた、といえるかと思います。現在の北海道農業につきましても、冷害あるいは厳しい気象条件の、あるいは開拓のプランといったようなことで百年の経過をふまえて確立してきたといえるかと思います。そこにはやはり自然を敬ったり、共存を願ったり、先人達の農業に対する強い姿勢が伺われるわけです。いま科学技術がご承知のように目覚ましい発展をとげておるわけで、農業の生産性も飛躍的に高まっているということでございますが、一方では経済的な面、効率性といったようなもの、を重視するといいますか求める余り、これまでの土地あるいは自然といったものとの係わりが薄れて、農業をとおして得られる文化の重要性といいますか、そういったものへの認識も薄れてきているのではないかというふうに思われる訳でございます。確かに国際的にも技術革新のテンポが速まっておりまして、農業研究の素早い対応が必要になってきておるわけでございますが、今後の百年二百年と続く豊かな農業を実現していくためには、自然と調和して環境にあまり負担を掛けない農業の研究の取り組みが大事でなかろうかと思います。

このような状況から、これまで北海道草地研究会は非常に研究あるいは技術開発などをとおして、北海道農業の貢献にかかわってきた訳であります。草地農業が密接に係わってきた地域社会・風土・文化といった視点から、広く多くの分野の方々に意見を頂いて、論議をして頂くことは大変意義の深いということで、今回のシンポジウムを計画したわけでございます。講師にお願いいたしました諸先生は大変お忙しいなか、快くお引き受けいただきましたことに対し厚くお礼申し上げます。今回結論はでなくとも、お話をとおしてこれからの21世紀に向けた活力ある草地農業といったようなものに向けて、夢のある論議を引き出していただければと期待しております。いろいろな論議を楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

**落合**

どうもありがとうございました。では、引き続きまして講演に入りたいと思います。講演の司会は副会長であります北大の島本先生と帯広畜産大学の福永先生にお願いいたします。よろしくお願いいたします。

**司会（島本）**

それでは早速始めたいと思います。ただ今ご紹介にあずかりました北大農学部の島本です。こちらは帯広畜産大学の福永先生です。私が最初のお二人の講演者の紹介をさせていただきます。

最初お話しをいただく方は高畑さんです。「森林と草原の間」というテーマでお話しをしていただきます。高畑さんは、1935年東京にお生まれになり、1959年東京農工大学農学部農学科を卒業されております。専門は作物を選考されたそうであります。ご卒業後、直ちに農水省の研究機関にお入りになり、それ以後一貫して牧野の利用に関する研究に従事されてきております。その間、海外でも非常に多くのご活躍をなされており、本年３月に東北農業試験場を退官されました。聞くところによりますと、来週には東カリマンタン（元ボルネオ）にお出かけになるという大変お忙しい中、今日お話をいただくことになっております。北海道に住んでおられる方は多分ご存知かと思いますが、高畑さんはご専門のお仕事の他に、「北海道の山菜誌」という本をお書きになりましたように、山菜を大変愛しておられる方です。その意味でも自然とのお付き合いが非常にお上手な方と、私は見ております。高畑さんには草地の科学サイエンスということで、シンポジウムのトップバッターとして広く草地のことに対しお話いただけるものと期待しております。では高畑さんよろしくお願いします。

**高畑**

高畑です。北海道草地研究会30周年ということでおめでとうございます。このような盛大な大会に発展しましたことをお喜び申し上げます。わたしは名前が高い畑を滋（しげ）らすということなものですから、名前に義理立てと申しますか、大変忠実に山地の方の牧野の植生改良ということで長い間仕事をしてまいりました。いわば遺伝子型と名前が一致した大変珍しい例だと思います。長い事札幌の郊外にあります羊ヶ丘で仕事をしてきました。この羊ヶ丘という所は昔月寒の種畜牧場で、明治39年1906年に開かれた牧場です。古い話しをしますと、明治44年高村光太郎（彫刻家で詩人である）が月寒に来られて、月寒の丘の上から読んだ詩がございます。高村光太郎という方は当時農商務省の官費留学生としてフランスで勉強していた、いわゆる私共の先輩といえる方なんです。話しの種に一つご紹介したいと思います。“平原に来い　牛がいる　馬がいる　貴様一人や二人の生活には　有り余る命の糧が　地面から湧いてくる　透き通った空気の味を　食べて見よ　そして　静かに　人間の生活というものを考えろ　全てを捨ててここに立ち　石狩の平原に来い”という大正の始めに出された詩「道程」の中に納められています。まことに月寒の牧場の丘の上から眺めた時に湧いて出るような気持ちを、大変よく表していると思います。ちょっと残念ですけれど、いまは月寒の丘の上からは高層ビルがニョキニョキ見られるようになりました。何と申しますか、大地の恵みを感じるような、この詩に歌われていたような気持ちがなかなか湧いてこない状況ですけれども。もう一つだけ紹介させていただきたいのですが、北海道が生んだ女流作家三浦綾子さんの小説にそのものずばり「羊ヶ丘」とう小説がございます。展望台の上から草地をよくご覧になっている方には当たり前なんですが、風が吹いてまいりますと草がなびきますね。風の通り道なりにこう草がゆだねるのですけれど、草凪ぎといっておりますが。草がなびいて乱れるさまを主人公の揺れ動くような気持ちそのものを、そういう状況を表現されているという、大変印象深い作品でございました。

こういうお話しをしていると私の持ち時間が終わってしまうということにもなりかねませんので。今日の演題でございます「草地と文化」という事から私なりに考えまして、一つの文化というものを私は幅広く捉えていきたいと思って望んでまいりました。定義して言えば「人間が生きていく上で必要な全ての活動」を文化、というふうに言いたい訳です。草地農業、アグリカルチャーもカルチャーの大事な部分ですし、それを支える科学技術というものも文化の大事なものだということです。今日はそういう自然をどう捉えるか、自然と人間との関連という事を考える基になる科学的な成果について、若干聞いて頂きたいと思います。先ほど控え室でも「草地と草原とは違うのか、おまえは草原という名前を使っているけれど」という話しになりましたれども。私は幅広く捉えるということで、あえて“草原”という言葉を使ったまでございます。北海道で“草地”といいますとどうしても牧草畑の、牧草を人工的に植えた草地というふうに捉えられがちのものですから、もう少し幅広く捉えて頂きたいということで、この言葉を使っております。

北海道の草地（草原）という位置付けということからお話ししたいと思います。その前に、最近地球儀がテレビの映像によく映るのですけれど、地球全体の陸の中で草地の占める割合というものを、皆さんどのようにお考えでしょうか。実に約¼近くが草地という状態で占められております（表１）。(OHPを使ってご説明していきたいと思います)。植生というのは炭酸ガスと太陽の光と水という基本的なもので成り立っているわけですね。そういう事から、縦軸に温度を横軸に湿り具合を現しています（図１）。上が寒く下が暑い、左から乾いているから湿っている方に移っていきます。森林が出来あがるのは、湿度からいって半乾燥地帯から湿っている側、温度からいって亜寒帯より暑い側という条件のもとにだけ、森林が出来あがっていきます。

**表１．世界の土地利用（ＦＡＯ世界生産年鑑 1987）**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 陸地面積 | 131 億ha | （南極大陸、内水面を除く） | 100 % |
| 農耕地 | 15 億ha | （果樹を含む） | 12 % |
| 草地 | 32 億ha | （人工及び天然草地） | 24 % |
| 森林 | 41 億ha | （回復可能な伐採跡地を含む） | 31 % |
| その他 | 43 億ha | | 33 % |

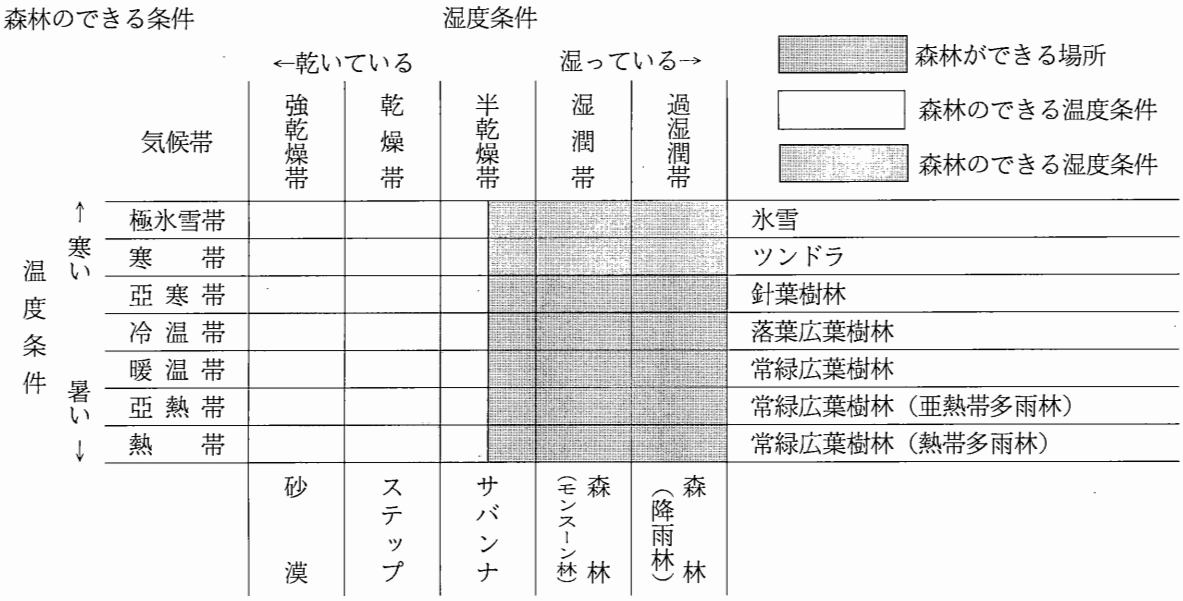


**図１．温度と湿度の条件と植生**

北海道は、北海道といいますか日本は過湿帯に入っていて、冷温帯で一部亜寒帯から亜熱帯にまたがる場所にありますから、極めて森林の適地だと気候的には考えられております。理屈の上からだけではなく、最近リモートセンシングといって、地球観測用の衛星が地球の回りを幾つも回っており、そのデータの一年間の変化を基に植生区分をしているのですけれども、その宇宙衛星からみても大変広い範囲に草地の適地が広がっており、地球各地でそれぞれの独特な草原・草地文化が発展しているのが伺われます。それからもう一つ、科学技術上の大きな進歩の一つであります気象衛星からのデータと各地の気象観測のロボット化がございます。これで大変正確に地表面の隅々まで気象的なデータが捉えられるようになりました。例えば、今まで大ざっぱな数字しか得られなかったのですけれども、降水量を細かくみていくと北海道でも年間で1,000㎜以下の所がみられ、一見森林の適地であることは間違いないですけれども、日本の森林の適地のなかでは草地の立地する条件が整っているのが北海道である、といっていいかと思います。

こういうふうにグローバルなお話をしているだけですと、「ああ、そういうものか」と思われがちなので、一つ私どもがやりました仕事の紹介をさせて頂きたいと思います。札幌の南の方にあります羊ヶ丘の中のさらに南の方にあります所で、元は名前の付いていない場所でしたが、それでは仕事に不便だということで研究室で羊南台と名付けました。羊ヶ丘の南向きの斜面で白旗山に向いた所です。たまたま東西に谷が走っておりまして、そこへ向かって南向きと北向きとの斜面が対比しているところでございます。その状況は講演要旨に載せてありますが、20年前に樹林を伐採し草地造成を行い牧草を蒔いて、

対照にトドマツという針葉樹を植えた所です。北斜面は肥沃で水分も多いので牧草はよく生え育ったが、他の潅木などもよく育つため1年か2年のうちはよいけれど結局負けてしまった。南斜面は発芽が難しかったが何回か播種を繰り返しているうち、よくササやススキと馴染んで収量は低いけれど長持ちした、という結果が得られております。北斜面はきれいに刈り払って牧草地化したのに見事に森林に戻ってしまい、草地造成をした場所とは思われないくらい、よく樹が生えてしまったという所です。南斜面はきれいな草地状態を保っています。南斜面は降水量からいきますと十分に森林となる所なわけですから、植えればトド松は見事に根付いて大きくなりました。しかし、1986年に山火事があり野草地の所だけ燃えてしまいました。当然その中にあったトド松も燃えてしまいました。全体として、これは誤解を招くかもしれませんが、山火事を含めた生態系で考えますと、この羊南台の南斜面は数少ない草地の適地なんだと思います。北斜面と南斜面の気象的な状況を2年間に渡って調べてみました。南斜面は北斜面より最高温度が高く、40℃ぐらいになり風速が高まり、何よりも大きいのは蒸発量が全然違い3倍以上増える。当然降水量と比較されるわけですが、1ヶ月100㎜の蒸発量というのは年間では、単純に広げる事は出来ませんが、1,000㎜分ぐらいの降水量が蒸発していくという事になります。こういう所では差引すると砂漠並みの乾燥状態が生じてくるといっていいかと思います。草地になったから温度が上がり風速が強くなり蒸発量が増えたのか、温度が上がり風速が強くなり蒸発量が増えたから草地になったと言うべきか、ともかく20年たってもこういう所では安定した草地が得られております。

これは人間が働きかけ（放牧ですとか、火入れですとか、刈り払いですとかの人為的インパクト）を行って、その結果草地が成り立っている。ただ単に草地が出来るのでなくて、人間が人間との関係で草地が成り立っている。これはまさに人間が必要な活動を自然の摂理を利用して働きかけ、適当に人間と自然との関係を作りあげているんだ、ということを示していると思います。

今日トップバターということで前座を勤めさせていただきましたけれども、私どもの立場からは北海道の草地というのは、まさに文化的な産物だというふうに言っていいかと思います。人間が働きかけを行いながら作り上げてきた草地によって、これから講師の先生方によって話されますような自然からの恵み（草地からの恵み）が得られるわけで、自然と人間との関係はそういう所にある。これを共生関係といっております。そういうことを理解しこれからの草地科学の進歩をはかっていきたいと思っているわけです。ご静聴ありがとうございました。

**司会（島本）**

どうも高畑さんありがとうございました。質問をうけるとよいのですがあまり時間がありませんので、ご質問のあるかたは後で集めて回りますので質問用紙に書いてお渡し下さい。

次の講演していただく方は加藤幸子さんです。加藤さんは1936年札幌にお生まれになり、その後中国、東京にお住まいになり、1955年に北海道大学理類に入学されております。加藤さんのいろいろな著書から推察するところ、大変勇猛果敢なクラブであります山スキー部に女性第一号として入部されており、多分そのことからいや想像ですが、北海道の自然を本格的に楽しむことを始めたのではないかと思います。農学部に進学後果樹そ菜園芸教室でイチゴの繁殖に関する卒業研究をされ、卒業後農林省農業技術研究所に奉職されております。その後のことに関しては園芸学講座の80周年記念誌によりますと、「安保の波にもまれ、人生経験を積み、そして思いがけず文章を書く仕事に就いてしまった。」という記述になっておりました。今現在は皆様がご存知のように小説家として非常にご活躍なされているわけですが、その事に関しての一端はお手元のプロフィールに載せられております。その中の一番大きなイベントは1983年に「夢の壁」で第88回芥川賞を受賞されたということは皆さんご存知かと思います。その他小説家としていろいろな賞をたくさんお受けになられております。加藤さんの作品にはテーマがいろいろおありですが、必ずその背景に非常に広い草原、草原といいますか植物があって鳥がいるというような、人間の精神活動にとって一番重要な結びつきのある、そういうものがいつもバックに表現されています。私達企画した者としては、そういう中によく草地というものも入ってきておられましたので、その辺を中心に我々に何か提言していただけるのではないかということでお願いしたわけです。加藤さんどうぞよろしくお願いいたします。

**加藤**

加藤です。とても詳しくご紹介いただいて本当に恥ずかしくて、何かこの壇に立つのがちょっと躊躇されるような気がしました。農学部出身ですけれども、最初は卒業してからしばらくその様な関係の所で仕事を

していたのですが、それ以来すっかり離れてしまいまして、自分の手で土を耕すということもなくなってしまったので、ご期待に添えるような話は出来ないと思います。むしろ、東京暮らしのほうがずっと長くなりました。それでいながら北海道の体験に培われたと思いますけれども、自然がいまでも好きで、北海道を含めましてあちこちの自然地を歩き回っております。その様な者として、そして又小説家として仕事をしている者とし、草地について感じていること思っていることを、間違っているかもしれないのでそれは後ほど先生方に訂正していただくこととして、率直にお話させていただこうかと思って来ました。

ここに来る数日前ですけれども、私の非常に親しいピアニストの島田さんという環境音楽のサティーを弾く人とお話をしていて、「今度実は草地研究会のフォーラムで札幌に行くのよ」と申しましたら、「それはどういう事をするの？」と聞かれました。「一口に説明出来ないけれども、例えば人工飼料だけで育った牛が出す牛乳というのはやっぱりいろいろ問題があるんじゃないかしら。ただ反対に、今ある自然環境が全部草地化されてしまったら、また困る事が起きるのではないでしょうか」なんていうことを言いましたら、彼女は非常に良く解ったようにうなずきまして、「当然よね。それでそのソウチ研究会の人は皆人工ソウチにしたがっているんですか」と言うのです。何だか話が食い違っている、変だなと思ってよく聞いたら、草地を何というか“イクイプメント”の方の装置とすっかり間違えていまして、草地研究会というのはその“イクイプメント”を研究する会と思って、牧畜も全部そういう装置にしてしまうのかと思ったのですね。ブロイラーなどはそういう一つのいわば工場生産みたいになってますので、そういう事をきっと考えてしまったのではないかと思うのです。それほど草地という言葉は私の日常ではあまり用いられないし、周りでもあまり出てこない言葉なんですね。ですから草地と言われても、先に高畑先生のお話にもちょっとありましたけれども、具体的なイメージが涌いてこないという事があります。似ている言葉というのは幾つかあるわけですね。一番懐かしいというか、子供時代からですね、よく親しんでいる言葉としては“草はら”とか“野原”という言葉です。今の多くの大人達は、東京のような都会も含めて、原体験として草はらとか野原で遊んだ体験を持っているわけですね。それならば東京に住んでいる都会人でもよく解り、イメージがパーと涌いてくるわけです。野原で虫を追いかけたとか、花を摘んで遊んだとか、ころんだとか、草野球をしたとか、いろいろあるんですが。“草地”という言葉はそういう事とは少し違う、ぴったりではないだろうと。もう一つの似た言葉に”草原”という言葉があります。これも先ほど高畑先生がお使いになりましたけれど。“草原”という言葉を使われると何となくやはり雰囲気が解ります。最近テレビなどでよく出てくる蒙古の風景を見ると、あそここそ草原という所にふさわしいような場所だなあと思います。６月半ばごろに機会がありましてカザフスタンに行ってきましたが、カザフスタンという所は本当にいろいろな自然環境がある所で、天山山脈の方に行きましたらもう3,000mくらいの本当の高山地帯になるわけです。それから北の方のシベリア近くに行きますと湿地帯がありまして、それは少し草原ぽい感じもありますが、ツルが来たりするのです。それから凄い砂漠地方もあって、砂漠、半砂漠というか半乾燥地帯、の所にはモンゴルからの続きだと思うのですが、草原地帯が広がっておりました。蒙古の牧畜民と同じようにユルタと呼ばれるテントに居住し、草原でぐるぐると放牧している人達が所々でおりまして、素敵だなあと思ってちょっと話をしたりして来ました。やはり、そういうカザフスタンの草原のイメージというか、果てしない平らな大地に草が生えているというのが、草原という語感から来る一番ピッタリとしたイメージではないかと思います。それからもう一つ、草原には日本の原風景としての草原というのもやはりあるのではないかと思います。それは一面ススキの原でしょうか。もうちょっと乾いた所になりますとチガヤの原。チガヤの原は５、６月頃になりますと非常にきれいな銀色に光りながら穂がなびく、素敵な草原です。それから、山の日当たりの良い所にはササ原があります。それらが日本の原風景としての草原ではないかなあと、私は思うわけですね。そういうことならば私達にさっと具体例が思い浮かぶのですけれども、やはり草地という言葉の響きだけで聞きますと、普通の人にはちょっと摑みにくい所もあるのですね。もちろん、それは私達が草地のことを実際に勉強していないからでもあるわけですけれども。まず最初にそんなことを感じました。

余談になりますけれども、東京辺りでも適当な場所さえあればすぐにチガヤ原、ススキ原になることができるんですね。私は東京でも大田区といって東京湾に面している区に、もう30年近く住んでいるわけですけれども、昭和30年代から40年代にかけて東京湾はほとんど埋め立てられてしまいました。すごい自然破壊だったんです。東京湾は死の海だといわれるようになってしまいました。その埋立地が、いろいろな都合でだれにも使用されなくなって、暫く放置されていた時代があるんです。私

が住んでいた大田区の埋立地がその様な状態でした。始めはもうどうせ草一本も生えていない、気持ちの悪い人工の土地だというふうに思っていたので、行く気もしなかったのです。けれども、ある日、そこに野鳥がたくさん集まっているという話を聞きました。もう埋め立てられてから5～6年経ったころです。私と一緒に自然観察しているグループの人達と一緒に見に行ったことがあるんです。埋立地というのは海底の泥を陸地にはね上げて造るものですから、最初は塩分が吹き出して、魚の死骸とかカニの死骸とかが混じっているような、本当に緑などのない土地なんです。けれども、5～6年経って行って見た時には、そこは一面の草原になっておりました。おもにチガヤでしたが、本当に綺麗な緑だったですね。たまたまその上に自然に雨水が溜まって池ができたり、それから海の方にまた潮流の関係でしょうか、泥が寄せられまして元どうり干潟に復元している部分がありました。人間が放置していた故に、むしろ自然が自力で戻った状態なんですね。その時にもう野鳥の宝庫になっておりまして、たくさんの渡り鳥のカモやカモメが冬に渡来してました。このようにですね、その埋立地に余り素敵な自然が甦っていたものですから、みんなでここを何とか保存してもらおうということで、それから10年に渡って市民運動をいたしまして、どうやら自然公園になることが決まりました。いま羽田空港のそばにできております東京湾野鳥公園というのがそれですが、元は完全に埋立地だったのですね。そんな状態でススキやチガヤという草は場所さえあれば、関東地方ではわりにすぐに復元するらしいと、体験的にはそういうふうに思っています。

もう一つ草原という言葉から喚起される違う種類のイメージとしては山の草原というか、高山植物のいっぱい生えている、または山の花が咲き乱れている高原というイメージも私の中にあります。今年の夏に山形県の月山に登りました。月山には中腹から山頂にかけて本当に広大な高山植物の草原が広がっていました。こういう花畑のような草原も日本の中にはたくさんあるのではないかと思います。大雪山を初め北海道の山にももちろんあると思います。そうなるとですね、いったい“草地”と“草原”というのはどのように違うのかと、何となくその区別がよく解らないという事なんですね。まあそんなにこだわる必要はないかもしれませんが。たまたま私が言葉を使う仕事をしている者なので気になっているということです。また後ほどいろいろ解説していただこうと思っております。

高畑先生のお話しをとても面白く伺っておりました。詩とか小説の話も出まして、私のお株をすっかり取られてしまったような気持になっております。けれどもやはり自分の領域として、このあたりで今回のテーマに関わりのある文学作品について二つばかりお話をしてみたいと思っています。

皆様よくご存知だと思いますが、一つはスイスのヨハンナ・スピリの書いた「ハイジ」という有名な児童文学なんです。今日は男性の方が多いのでどの程度お読みになったかわかりませんが、たいていの女の子はこの「ハイジ」を読んで育っております。これは1880年代に書かれたといいますから、100年以上前の作品なんですけれど、非常にきれいな山の風景や牧場の描写があちこちに出てまいります。読んでいない方のために簡単に説明しますと、ハイジという女の子がお父さんもお母さんも亡くなってしまって、孤児になってしまうんですね。5歳と書いてあるんですけど、5歳にしては物事を考えたり言ったりするので、もっと私は年上ではないかと思っていたんですけど、小説のなかでは一応5歳ということになっているのです。そのハイジがですね、アルプスの山に住んでいるアルムおじいさんと一緒に暮らすことになって、町から山にのぼってきます。このアルムおじいさんは酷く偏屈で、機嫌の悪い時は村の人達からは恐がられていた人物なのですね。でもハイジは非常に無邪気で素直な子なので、よくおじいさんに懐いていくわけですね。友達としてはヤギ番のペーターという少年がいまして、このペーターと一緒にヤギの群れをつれて山の上の牧場に行くのが、ハイジの大好きで楽しい日課になってくるのです。ところが、突然に都会のフランクフルトの大金持ちの家のクララというお嬢さんが、病弱で車イスに乗って暮らしているような子供なんですけれど、このクララの話し相手に都会に連れて行かれてしまうんですね。クララはとてもよい友達だし、そのおばあさんもまた大変よいおばあさんなんですけれど、ハイジは山とか牧場が恋しくてたまらず、だんだん病気になって夢遊病みたいになってしまうんですね。とうとうハイジはまた山に戻されます。そして、クララがそこに遊びに来て山の草原で一緒に楽しく遊んだりしていくうちに、クララの足が立って身体も直ってくるという、非常に健康的な小説というか明るい小説なんですね。ここに出てくる山というのは、アルプスの高い頂きに近い方ではなく中腹ですね。いわゆる自然草原地帯のことを指しております。この物語の中の牧場の情景がどんな場所かを知るために一部を読んでみます。「ペーターが何時もヤギを連れて1日を過ごす牧場（まきば）は高い岩が連なる麓にありました。（時々飛ばします。）ペーターは日当たりのよいまきばの、ここの所で草地が出て来るんですね。草地では

なく多分「クサチ」と読むんだろうと思うんですけれど、まきばのクサチに大の字に寝転がって登り口の疲れを休めました。それから、ハイジは寝転んでいるペーターのとなりに座ってあたりを見回しました。下には谷が朝の陽を燦燦と浴びて広がっています。目の前には広々とした野原が上へ上へと空まで続き、その左手にはとてつもなく大きな岩の塊がそびえています。ハイジは声もたてずに座ったまま周りを眺め続けました。あたりは深い大きな静けさに包まれ、ただそよ風がやさし青いツリガネソウや金色に光るシストの木の上をそよそよと吹き渡って行くばかりでした。草花はここかしこで細い茎の上をうれしそうにかすかに震わせて風に答えていました。」まあ、こんなような情景なんですね。私はこれを、100歳で数年前に亡くなった野上弥生子さんという女流文学者の方の訳で岩波文庫の「アルプスの山の娘」で読みましたけれど、それ以来すっかり山のまきばに憧れてしまいました。もちろん、それだけの理由ではありませんけれど、北大農学部に進学しようと思ったのも多分この本の影響が染み込んでいたせいだった、と思っております。今でも非常にこの本は少女達に人気があると思います。この本は本家のスイスとかヨーロッパの諸国より、日本人に人気があるそういう作品のようですね。日本人好みの作品だということがいえます。だから、私達の多くが夢見る、憧れる、そういう草地または草原という風景の代表的イメージは、いわゆるハイジの作品にでてくる世界ではないかと、私は思うのですね。雪の頂が遠くに見えていて花が咲き乱れていて、草原に、草の上に牛とか山羊とか羊とかの群れがいて、というような非常に牧歌的な、ロマンチックな風景ではないかと思います。

いま、北海道の観光旅行は非常に東京の若い女性のグループなどに人気があるわけですが、その理由は多分そういうふうなことではないかと思っているのです。現在の北海道の風景というのはこのハイジの牧場要素を含んでいますから。広々とした草原に花が咲き乱れたり、遠くに山並みが見えたりというような風景ですね。だからこの夢の持続としてはですね、北海道の草地というのは非常に役だっていると思いますし、観光資源になっていると思うんです。でも、それが本当の草地の実体がどうかということには関係がない。実際に柵の外から眺めていればそういうように美しく見えるけれども、家畜と面と向かい合ってみれば、凄く臭くて汚いし、ハエやアブもブンブンブンブン飛び回っているし、牧場の中を歩けば糞の中に足がベチャと入ってしまったりするようなことがよくありますから。北海道に憧れてきた人がそういう目に合ったら、半泣きになって帰って「もう牛乳なんか飲まないわ。」と言いかねないような状態になるんでないかと思うんですね。観光会社の人はそれをよく判っていますから、実体験などはほとんどさせないわけなんです。とにかく北海道の草地というのは、ハイジの夢を再現させる舞台としては最適であると。彼女達の、若い女の人達の夢を壊した方がいいのか、壊さない方がいいのかという議論は、また別にしたほうがいいと思いますけれど。

もう一つ紹介したいと思う作品があります。それは武田泰淳という、もう亡くなりましたけれど、本当の、本当のというのは変な言い方ですけれど、すごい小説家です。彼が書いた「森と湖の祭」という小説です。これはかなり長い小説ですけれど、全編東北海道を舞台にしています。主人公はゆき子というなぜか私と同じ名の女の画家と一太郎という非常に野生的なアイヌの青年です。アイヌの民族解放という主題を軸にして、二人の関係が大変荒々しいタッチで描かれているんで、ハイジとはまさに正反対の雰囲のなかなか迫力のある小説です。武田泰淳は1年間だけ北大の助教授を勤めたことがあるんですね。昭和21年から22年にかけてですが、その時に北海道を舞台に何か書きたいと思われたのかもしれません。この長編小説を書くにあたっては、40日かけて東北海道を取材旅行に歩いております。弟子屈、屈斜路湖、標茶、羅臼、塘路、釧路それから稚内の方まで行っております。それでこの構想を得て、そして題を「森と湖の祭」としたわけですね。非常に面白い小説ですので皆様お読みになられることをお薦めしたいと思います。でも今日は作品論とは別の観点から私が気になるところを、お話ししたいと思います。それはこの小説の中では確かに題名どうり森と湖は北海道の雄大さ、野生を表す風景として頻出してきます。ほとんどこの森と湖で行われる物語です。それから、海辺とか漁村も割合と出てきます。ところが、いわゆる草地ですね、その草地の描写がほとんどないですね。というより、かなり昔に読んだのでよく覚えていないのでが、全くなかったのかもしれません。これはどうゆう事なんでしょうか。いま道東というと草地の国という印象があるのですけれども、武田氏が取材をしたのは昭和28年ですね。この道東のその頃の景観というのは、多分森と湖に代表されるようなものだったのかもしれないと、この小説を読むと想像してしまうわけです。この点は事実かどうかはわかりませんが、小説家の目に写った道東というのは、あの牧場の、ロマンチックなハイジの草原でもなければ、ロマンチックな花の風景でもなくて、森と湖だったんだと。それと北の海だった。荒々しい海辺だったんですね。草地の印象は非常に薄かったと

いうことだけは確かです。私自身が北大におりましたのは昭和30年代の始めです。その時も道東の辺りに行きましたけれども、その記憶をたどってみても、どうもやはり今の道東とは雰囲気がだいぶ違いまして、一面に広がる牧草地とか畑という風景ではなかったのではないかと。当時の私にとっての北海道というのは、やはり森と湖の印象なんですね。それとあと原野だったような気がするのですね。原野は非常に多かった気がする。原野は草地かといえばやっぱりちょっとイメージとしては違うんでないかと思います。だから、北海道の本来の風景というのは40年前と今とくらべてみますと、ずいぶん変わってきてしまったのではないかと。草地が主役になって来たのではないかと。そういう事実をやはり認めた上で、いろいろな話しをしていかなくてはならないのではという気がしているのです。私は別に草地の風景が嫌なわけではありません。それどころか、明るくて広々として解放的な草原（くさはら）に立つのはとても好きで、そしてよく学生時代も牧草の畑に座ってぼんやりしてました。広い明るい草地では心も身体も何か本当にリラックスする感じがします。私の子供達も小さい時は知人の北海道の牧場に連れて行って、いろいろな動物達と対面させたり、牧場の中を歩き回らせたりしていました。

ユングという心理学者が、これそっくりな言葉ではなかったと思うんですが、こういうことを言っています。「人間の心には意識下に隠れていることが多い。それが人間の行動とか感情を左右しているのである」。それからまた、「人間には祖先から受け継がれた深層心理が必ずある。」と。だから、私達が自分で考えて行動をするというよりも、むしろ背後の目の見えない、あるいは自分では気がつかない奥深い部分によって左右されているところがある、というようなことを言ったと思います。これもちょっとうろ覚えで申し訳ないんですが。そうしますとやはり私達の祖先であるサルさんが、暗くて敵に狙われやすい森から、明るい見通しのよい草地・草原に出て来て住むようになった時、すいぶんホットしたのではないかなあと思うのですね。だから、もしかしたら私自身が草地に対して深層心理が働いて、リラックスするのか。これはこじつけになるかもしれませんが、ちょっとそんな感じもするのですね。たとえば公園に芝生があると皆集まってくる。東京の人も芝生が好きです。私は自然破壊だから木を切らないで、木切って芝生にするのは良くないといっているんですが。芝生に皆よく座ってですね、お弁当食べたり、遊んだりしていますから、やはり人間にとっては見通しのよい草地というのは安心できる所なのかもしれません。ただ、環境は人間だけの問題ではないわけですね。人間にとっては、確かに草原は生活しやすいかもしれない。けれど、やはり人間にはちょっと生活出来ないような、暮らせないような森とか原野とかあるいは湿地が、実は人間以外の沢山の野生生物にとっては、まさに生活の場であるということを、忘れてはならないのではないかと思うのですね。人類がその同じ仲間の人という一種のみで、地球上でずーっと生存し続けていくことはありえないと思います。だから、私達自身のためにも、他の人間のためにも、それから何百万種いる他の生物のためにも、やはり草地以外の部分が、環境が、たくさんなければならない。それを現在は意識的に、そういう多様な種との共存をはからねばならない時代になって来ていると、そういうふうに私は思っております。もちろん、草地とか草原にもそこに適応して生息している生物も沢山住んでいると思います。大きな尾音をたてるので大カミナリシギともいわれているオオジシギですか、あの鳥などは北海道の牧草地によく見られるので、私はおもしろがってよく観察していますけれども。まだ他にもいろいろ草地に適した動物がいると思います。けれど、ただ草地を無闇にどんどんどんどん拡大するということは、やはり多様性という点から見るとよくない。それから、不要になった草地ですね。あまり価値のないような所を草地にしてもしょうがないので元の環境に戻すとか、また草地の中に全然人間の役に立たない藪とか川を保全することによって、他の野生生物の環境に適した場所にもなるでしょう。それが回り回って、やはり人間にとっても好ましい豊かな環境になって来るし、それがまた、文化を生み出す基になるのではないかと。やはり豊かな自然環境なくしては、本物の文化は育たないのではないかと思っています。それから、今ある草地はなるべくそれが化学物質に汚染されたりしないようにとか、自然の循環が保たれるという方法が、余りとられていなかったのではないかと思うんですけれど。やはり、そういうことに配慮してくださると、他の生物も草地で牛や羊達と一緒に共存することが出来るのではないかと思います。

最後にちょっと視点を変えて、別の観点から都会人にとっての草地の意味を考えてみます。さっき草地は都会の人にとって、観光資源として役立っているというお話しをしましたけれども、実はもっともっと自分達の生活に役に立っている。想像以上に密接に関わっているわけです。私達が日頃食べている、あるいは飲んでいる牛乳とか、乳製品とか、肉類などはみんな草地で育った家畜のおかげをこおむっているわけです。その家畜が日々どのようにしてエサを与えられているのか、どのような暮

らし方をしているのか、それから、どのような過程で製品が私達のスーパーマーケットまで来るのかとか、あるいは製品に成分表は出されていても農薬とか化学物質がどの程度使用されているのかとか、そういうことは全然情報として一般に知らされていないし、パックにも表示されていないのです。それ以上に問題なのはやはり私達買う側にあるわけで、普段はそんなこと知りたいと思わないで暮らしています。スーパーに行きますと何十種類もの牛乳が並んでいるんですね。北海道のも多いですけれども、いろんな他の場所からの牛乳も並んでいて、みんな同じようにですね《天地の恵み》とか《健康食品》とか書いてあるので、どれでも同じような印象なんです。結局私達にとっては、その時何を選ぶ基準にするかというと、素敵な絵が描いてある、素敵な言葉が連なっているとか、つまりコマーシャルですね。それから、時々ある牛乳に対しバーゲンをするので、その牛乳を買うとかですね。そういうふうになってしまって、牛達がこう育てられているからその牛乳にするとか、そういうのは全然関心が湧かないようなシステムになっているんです。だから、都会の買う側の人達と作る側の人達との間の情報交換は全然なされていない。何も顔つき合わせて一緒にお話しする、もちろんそういうことも大事なんですけれど、みんながみんなそうしなくても、内容や仕組みがわかるようにきちんと提示されていれば、私達都会人が草地について考えるキッカケもあると思うんですけど。そういうことはまずありません。

でも私自身はやっぱり、一番最初に申しましたけれど、鶏がブロイラーになって工場のように作られるというのは、よくないなあと。なぜなら、異常に太った鳥肉をたべるのは、やっぱり私達にとってももちろんよくないけれど、鶏にとって非常によくない。生ある限り鶏達は鶏の生を享受して健康に暮らさなければ気の毒だと思ってしまうんですね。牛も馬も他の全ての家畜もそうですが、彼らは私達に食べられるとか、搾取されとかの運命を担っているけれど、やっぱり生物であることには間違いないので、彼らがハイジの牧場の山羊達のようにですね、気持ち良く伸び伸びと健康的な環境で暮らしていけるということを、是非そうして欲しいと、私は家畜の身になってそう思います。また健康に育った家畜のほうが、きっと酷い劣悪な環境で育った家畜達より、私達に良い恵みを与えてくれるであろうと感じます。

つい最近10月の半ば頃に南ドイツに小旅行いたしました。聞くところによりますと、あちらの酪農家は民宿を兼ねている所が非常に多いということでした。その民宿も自然の好きな人とか、歩くのが好きな泊り客が多いものですから、敷地内に牧草地以外に野生動物が住んでいる林とか藪とか小川などを確保して、散策路なども作っている。そして、新鮮な材料を使った手作りの食品を提供するということです。どうしてこういうことが出来るかとたずねてみたら、環境保全に熱心な農家には、政府が非常に沢山の補助金をだしているそうなんですね。日本の補助金制度というのは、私も余り詳しくありませんけれども、例えば減反に対して出すとか、まるで環境保全と反対のマイナス面の方に出している気がするんです。ドイツの例のように、この新しい時代の補助金の出しかたについても、経済効率だけでなく、やっぱり自然環境とか野生動物のためにもなる農業の仕方、酪農の仕方をやる農家を育てる意味の補助金を出してもらいたいなと、私は思います。

時間がまいりましたので、また後はいろいろな先生のお話しを伺いながら、私の間違った考えを訂正していただいたりしながら、何か付け加えることがあったらお話し申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

**司会（福永）**

どうもありがとうございました。それでは後半のお二人をご紹介させていただきます。引き続きまして竹田津実さんのプロフィールについて、若干ご紹介させていただきます。詳しくはシンポジウムのしおりに書いてあるのですが、写真家であり、エッセイストであり、獣医さんで幅広くご活躍されております。大分県にお生まれになり、1963年岐阜大学農学部獣医学科を卒業されております。学生時代から野生動物に興味があられたようです。オジロワシの調査を行ったことが縁で、卒業後北海道の小清水町農業共済組合家畜診療所に勤務され、1991年退職されております。獣医さんという大変お忙しい中、野生動物の生態特にオジロワシ、キタキツネの調査などを続けられました。その一つが有名なキタキツネ物語として、野生動物の好きな方はよくご存知だろうと思いますが、映画やテレビなどに製作され、意義ある賞を受賞されております。

私も、家畜でなくて草地の造成管理法をやっているんですけれども、この野生動物に大変興味がございまして、たまたま上士幌の大規模草地を調査している時にこのキタキツネの親子を見つけました。草の好きな野生動物でしたらまた別ですけども、こういう肉食の動物がなぜこんな所に巣を作っているのかなあと一瞬思って、スライドを取ったことがあるんですけれども。単なる牧草地というが、家畜だけでなくそういう野生動物にも貢献して

いるのかなあ、というようなことを一瞬考えたりなんかしましたんですけれども。草地と家畜だけではなく野生動物とのつながりというのもかなりあるのではないかなあ、と感じたりしております。竹田津先生は91年に退官されてから、アフリカ、ヨーロッパを、特に農村を歩かれて、その風景とか環境に対する細かな配慮に圧倒されたと、ビックリしたということを書かれております。今日はこのヨーロッパを中心とした農業と環境との関係について、スライドでご紹介してくれるということで楽しみにしております。竹田津さん、どうぞよろしくお願いします。

**竹田津**

竹田津です。この話しがあったとき大失敗しました。ちょうどその前後に、前後といっても数年前ぐらいから農水省の中国支場の高橋さんという方と一緒に、三瓶山の野火の全体的な推移なんかを勉強することがありまして、何回か高橋さんと現地でお話しするという機会があった時に、そういう雰囲気の中でこういう話しがあった時、何となく草地といったらまあいいやと言ったのが失敗の始まりでした。実はその草地研究会というのを知らなくて、獣医なのに草地研究会を知らないくて品のない話しなんですが、全然知りませんでした。この極最近、僕の知り合いというか友人というか、北大の家畜管理学をやっている先生から本をおくっていただきまして、入っていたお手紙の一番最後に「草地研究会でお会いできるのを楽しみにしています」と書いてあって、これは益々まずくなってしまってですね。そういう方々が実は入っているものであるといいうことを、全く予測しなかったのです。実は今朝まで東京におったんですけど、東京を出る時もいやでいやで仕方がなくてですね。何かうまく逃げられないかと思ったら、幸い秋田地方は霧でもって欠航ですというから、北海道は秋田と近いから期待したんだが、とうとう飛んでしまって、本日になりました。本当にどんなことが言えるかと心配しております。

実は、各企業が持ってますいろいろなセミナーに引っ張り出されることが多くなりまして、勉強させられています。今回も実は昨日まで3日間缶詰の勉強をしてきました。気になることが一つだけやっぱりこの数年あるわけですね。必ず、しおりにもちょっと書きましたけれど、20世紀を総括するということと、21世紀のアジェンダをどうするかというようなことの論議が盛んにあるんだけれども、今回もほぼそういうテーマでもってある企業が主催した会に参加したわけです。集まっているのはなかなかの人物でして、防衛庁から防衛局長とか、内閣調査室の室長である人とかですね、オーム真理教がターゲットとして殺すべき政府要人の2番目にあがっていた人、それから大蔵省の審議官とかですね。ジャーナリストでは嶌さんとか、企業のトップクラスの人達が、北海道からはたくぎん総研の石黒さんが入っていますね。それで、7年間僕は毎年引っ張り出されているわけですけれども、その中でですね、実は3日間缶詰でもって勉強会をするわけですね。ケンケンガクガクと夜中の12時まで、酒飲んでやっているわけですけれども。不思議な事にここ2年ぐらいからですね、食糧という問題についてそれほど、かつてほど考えなくなって、全体として考えなくてもいいという傾向が出てきている。今回も中国の爆発的な一つの生活レベルのアップとインドの人口の増加が、21世紀の世界の食糧事情にどう影響するかということが、かなり出るかなと思ったら、レスターブラウンの報告書についてほんのちょっと触れただけで、3日間酒を飲んでワンワンやった中で、全体的にいうと2分間ぐらいしか食糧問題がなかった。というふうに感じました。僕はそれは意外というより、ある意味の深刻さを持っております。どうやら日本というのは食糧については、かなり安心しきってしまったグループが育ちつつあるのかなあと思います。それが、特に政府の中枢とか、東京を中心としたその中枢部の人達の中にそれが広がって、いわゆるある意味では農業というのはまあ最悪の場合は無くても日本というのはやって行けるんではなかろうか、ということを考えている人達の広がりがあるんのではなかろうかというのを感じました。

これはその僕自身が何回かヨーロッパへ出かけて行った時に何時も感じたことなんですけっれども、我々農業者側から言ってかなりこの手抜きをしてきた、というのが原因ではなかろうかと思っています。手抜きとはどういう事かと言うと、自分達がいわゆる農業者と非農業者の間における一つの約束ごとを、確認をどうもうまくしていなかったんじゃないかと。確認といいうのはどのような事かというと、我々は食糧を提供する側であるけれども、提供するための少なくともこうゆう一つの約束事があるということを、お互いが確認しなかったために、日本国民の多くは食糧は安ければどこから入ってもいいという方向へどんどんどんどんいってしまっている、というふうに感じました。ヨーロッパを旅してみて一番感じた事は、ヨーロッパは、それはなかなかキチッとしているわけですね。特に、ヨーロッパは日本の補助金と比

べて決して低い補助金ではなくて、確かEUが各国から供託金とみんな税金を足して、多くの金を農業補助金に使っているはずです。EUそのものの総予算の中の農業補助金というのは凄い膨大なパーセントを占めていると、僕は確か記憶しています。それをベースにして考えても日本の補助金が決して少ないとは全然言いませんが、それほど多くはないんじゃないかと、僕は考えたんです。しかし、その考えている中でも、どうもその補助金という使い道が、全然違っているというふうに思います。

本日、このやけのやんぱちで、ヨーロッパを歩いてその感じたことをお話しして、ともかく持ち時間の35分を何とか脱出したいというふうに思っております。顔がよくないから早く暗くした方がいいというふうに思っています。スライドお願いします(以下スライドをもちいて)。

一つはヨーロッパの特徴というのは、僕は農村がどうあるべきかというよりも、農村がいわゆる都市生活者にとっては憩いの場所であると同時に故郷である、延々とあり続けるという姿勢が、かなり貫き通されております。農村へ行ったら綺麗です。見事に綺麗です。本当に、ハイジの世界を云々するのではないですけれど、現実にドイツへ行っても、イギリスへ行っても綺麗です。ですから、ある大学の、フランスはちょっと違うんですけれど、僕は各地へ行って大学の先生と話しした時「あなたの学校の女子学生が一番お嫁さんに行きたい職業とはなんですか」と言うと、圧倒的に「ファーマー」と言う。いわゆる農業者にお嫁に行きたいと言う人が圧倒的に多いわけです。これでフランスはちょっと違うんですけれど、圧倒的に多くてなおかつ高学歴ですね。実際調べてみると農業者のお嫁さんの学歴は各企業の中のトップであります。ニュージーランドのオタゴ大学に行った時に友達が居ったもんで、ちょっと聞いたらですね、同じ様なことを言ってました。ニュージーランドなんかではケタ違いに女の子の憧れは農家のお嫁さんになりたい。オタゴ大学というのは古い大学ですから大変由緒ある大学ですけど。じゃ、日本を振り返って見ると、僕は道東の小さな町に住んで居るんですけど、なかなかお嫁さんが来なくて、町長さん以下もうハチマキをしてですね、予算を付けてですね。本日ご紹介しますけれど、是非先生方にお願いしてですね、うちの町にお嫁さんを紹介していただきたいとと思いますけれども。そういう形になっているんですね。どうしてこれだけの差が実はついたんだろうかということは、その農村の綺麗さとかなり関係あるんだろうと思います。農村の豊かさを象徴する綺麗さをどういうふうに考えるかということなんですけれども。ご承知の方が多いかと思いますけれど、屋根の色とか壁の色とか外側のものは公共のものとの意識がありますから、大変規制されています。地区委員会ですね。「こんど屋根を変えたい」と言ったら、「じゃちょっと待ってくれ」といって委員会に集まってですね、「おまえの家なら屋根はこれとこれとこれの3種類の中から選びなさい。色は、壁はこの2種類の中から選びなさい、選んでそれでやるのならば補助金を出しましょう」というふうにしています。ですから、ほとんどどこへ行っても綺麗です。

イギリスでは場所により違うんですけど、6割ぐらいの補助金が出ています。ようするに、前と同じ石壁にするんなら補助金を出しましょう。農村環境そのものはものすごく古典的に、日本と違うのは、日本の不動産は新しかったら高く古かったら安いが、ヨーロッパの不動産は古いほど高いわけです。ですから、感覚が違うんですけど、少なくとも古典的ないわゆるかつての世界をキチンと管理するという感覚なんです。「道路が狭くてどうするんですか」と言ったけど、それはみんな我慢している。屋根の蔦に対しても補助金を出している町があるそうです。この石の橋は狭くて車が通れませんが、架け代えるのに皆反対して、このままでおけば補助金がでますということでこのままにし、川の向こう側に車庫を作り、主人は毎日歩いてそこまで行きます。ようするにそういう世界です。

これはアフリカのザイールという今問題になっているゴマのもっと奥ですね。(もっと僕の写真ピントが良くなるはずですが、僕スイマセン一応プロの写真家なんで)91年辞めた年ですね。向こうの農林大臣とたまたま知り合いで、当時日本のザイールの大使のムライリという人がお忍びで小清水に何回か遊びに来た経過があって、そういう関係で行った時のものです。実に綺麗なんですね。農村へ行って「いい感じじゃない」と言ったら、彼らは「いい感じじゃなければ住めない」と言ったんです。我々はアフリカを見るとき、そのあたりの所を凄く誤解しているんじゃないかと。北部の酪農地帯では草地は35年間1回も更新していないと、更新してなくて乳は沢山出ていなかったんですね。平均しみると2,200kgぐらいですね。ブラウンスイスが入っているのですが、ブラウンスイスのドメスティックの交配種が多いんです。「どうしてホルスタインを入れないのか」と聞いたら、「ホルスタインは乳が出過ぎるという問題がある」と言う。僕は乳が出過ぎるといいんだろうと思ったんですが、乳が出過ぎるとどうしても草地を荒らすから、そのくらいのもんでいいんだというような感じを盛んに言っておりました。牛舎もありません。ただ塩をやるだけです。時間に

なるとみな塩を食べたくて帰って来て、その間にダアーと搾るわけです。草地のありようはひどく、日本的にいうといかにも原始的です。新たに草として植えたのですかと聞いたら、牧草が元々あった上に植えたんですと。それが適度に混ざっているという感じです。かなりブッシュを残している関係で鳥とか動物はかなり沢山おりました。ここは大変好きな所です。アフリカというイメージの中では、皆さんきっとマサイを考えていると。マサイはご承知のとおり牛を沢山持っていんですが、あれは産業ではないんですね。ステータスんですよ。皆さん産業だと思っているけど、産業ではなく、ようするに嫁さんを沢山貰うために牛を飼っているんです。だから、一人で18人も持っている男がおって、この前会って「大変だろうな」と言ったら、ニヤと笑っておりました。マサイの放牧を想像してアフリカの牧場をみると思いますけれど、実はきちんとした牧場というのは方々に在りまして、結構面白い。96年に行った時はいわゆる人工授精をやっておりました。

イギリスは皆さんご承知のとおり景観を保全するという目的で、羊とかそういうものを飼うことを認めるということが多くあります。特に高冷地の様な所はそのまま放っておくと荒れてしまうので、羊でもなんども居ってもらおうと、羊１頭にたいして何んぼ補助金をもらおうと。それで、補助金が沢山出るもんですから喜んで沢山飼うと、面積の一定以上の数を飼うと補助金を全部カットされるというんで、なかなかうまくできた制度です。それで、適度な羊を放すことによって、景観をそのまま何十年間維持するというシステムになっているんです。羊１頭から出てくる値段で計算しましたら全然ペイしません。ですから、補助金が出て産業だというのは産業ではないのではないかと。この前タンザニヤに行きました時、大臣が「うちの産業は援助です」と言われたから、これも産業かなと思いますけれども。基本的には山野草をできるだけ残す格好の粗放の酪農をやっているということです。イギリス、ドイツ、ヨーロッパ、オーストリアも一部そうなんですけれど、全体としてかなりキチッとしている。ようするに、環境としてどういう風景とか、どういうふうなものが必要なのか、かなりキチッとした思想体系の中で、維持管理されているということがよくわかります。オーストラリアは昔もっと凄く徹底してやってしまって、後でみんな困っちゃてどうしようというくらいやってしまったということあるんですけど。ニュージーランドも野草そのものを残す、基本的にはイギリスで言えばヒースとかになるが、そういうものをかなりキチッと残して行こうという世界がありまして、それが楽しくて僕らも旅をしたわけですでれども。いろいろ聞いてみると、面倒だけどしかし羊にとっても牛にとってもいいし、自分達にとってもいいという意見でした。我々はなぜニュージーランドを旅するのかというと、実に綺麗なんですね。ようするにですね、これは全然我々はもうかないっこないな、という風景をもっております。それは、家畜を抱えた風景なんですね。その家畜を抱えた風景で、あの多くの、実はニュージーランドは観光立国としてやっていこうという方向があってですね、家畜をかかえた風景は実に良くできていると思いました。イギリスの牧草畑には樹が何本もあります。たくさんあるんですね。「作業上問題在りませんか」といったら、「問題あります」と言っていました。どうして切らないかというと、全部補助金が出ているんですね。切らない、残すことに補助金が出る。それで環境をですね保全する。いわゆる農村環境を保全するということについて、如何にEUが大量の金を使っているかということを、僕は考えて欲しいと思うんですね。ニュージーランドで日本と違うところは、如何に自分達の農村風景を綺麗に見せることに、すごくみんな努力しています。これはチョットしたことなんですけれども、こういうことは困りますとか、こういうことは止めてくださいというのを、日本だったら「厳禁」とか「立ち入り禁止」とかと書いているだけですね。あんな色気のないこと書かないで、もう少し色気があってなおかつスマートの看板を立てたらどうだろ、と僕は思うわけですけど。そういう事に対し一切日本の農村側は対応していない。農村の対応のまずさをドンドン拡大することによって、日本の農業というのはなくてもいいというか、ある意味では見放された自分達自身がそういう見放す作業をずっと今までやってきたんじゃなかろうか、と強く感じます。イギリスでロウバーという大衆車を借りたのですけれども、１台走ると向こうから車が来たらどうしようと考えるんですね。交差できないくらい狭いんですね。そういう所でもそのまま残してですね、土日になると都市から沢山の人が来るもんんですから、それはもう交通渋滞なんて話しではないわけですね。場所によっては…。それでも皆ブツブツ言わないで、その間はあっち見ながらこっち見ながら車の来るのを待つということをやる、という雰囲気をチャント残しているんですね。フットパスです。私有地ですけれど，都市の人達に自由に出入りしてもらう所を沢山作っているわけですね。牧場なんですけどどうぞ入ってください、しかし、ここから入れという意味なんですね。土日皆さんが楽しむならどうぞ楽しんでくれという。いろんなコースをつくってですね、それで皆が歩いています。放牧

地の牧柵のバラ線は入る所を決めて、そこにはしごみたいのがチャント掛かっていて、そこから入るようになっているんですね。そういう所がいたる所にあるんですね。

もう一つうまい機能というのは、農村がいわゆるファームインというのをもっているんですね。この前、開発庁なんかが日本にもファームインをやろうとドイツへ視察団だしたんですが、そのメンバーに聞いてみると泊る人を50人ぐらい考えているというんですね。50人ならもう宿屋なんですね。だいたい一部屋か二部屋なんですね。子供がもう家を出たので一部屋余ったからファームインをやる。最大５人ぐらいしか泊まれない所がいっぱいあるんですね。朝飯しか出さない、夕飯は頼めばちゃんと作ってくれます。イギリスでもって夕飯がないのは、おいしくないからですね。おいしくないという言い方はよくないんですけど、だから夕飯を食べないのだけれども。しかし、朝のご飯食事たって何が出るかといったら、なんて言うかゴチャゴチャ入れて、ミルクかけて、あれですよ何てことないですよ。その間にそこのおばあちゃんとか、おじいさんとか、経営者と長い時間話しをするということが、すごくうまく出来ているんですね。フランスなんかは徹底していましてですね、そういうファームインやる場合は年間40日の基礎講習をうけないとダメなんですね。農閑期に基礎講習をうけでですね、小さな村の歴史とか、その町村の農業とか、あらゆる子供の遊びからですね、そういうもの全部の訓練を受けるわけですね。訓練を受けて始めてファームインが出来るという。又グループの人が少し手伝うんですね。「わたしファームインやる」と言ったら、「それはアナタ大変でしょう、だからアナタの面積の半分は僕らが手伝う」と。近所の人が手伝う、農作業を手伝ってやる。なぜそういうことをやっているかというとですね、ファームインをやっている方が実は都市の人達にいろいろなメッセージを送れるということの良さを、農民が全部認めているんですね。俺達が如何に良い事をやっているか、如何に食糧を作っているか、良い食べ物を作っているかをチャント話しをしてくれよ、というそういう世界を実は構築するために、みなが手伝うというシステムを持っているわけですね。イギリスはそういう講習会なんかはないですけど、場所によっては定期的な一つの会合があって、その会合で情報を交換して、こういう所に問題があったというようなことをやって、それをそのつど修正していく、ということをやっているわけです。ファームインというのは実は都市に対してですね、農村部が放ったスポークスマンなんですね。ようするに、農村というのは如何なるものであるか、如何に良い素晴らしいものであるか、常に情報として出している。この凄さなんですね。日本でファームインを今やろうとしている30人なんかといったら、それは旅館と同じですからだれも話しをしないで終わると思います。そこに馬でも借りてきて、馬でも乗ってくれれば話しはするわけですよね。これは僕は今から北海道はキチッとやらなければならない作業の中の重要なもんだと思っています。

ドイツの環境については腰が座っているという感じがすんですね。緑の党どうして衰退したのかということをある時質問したら笑われました。あの時緑の党が掲げた綱領を見て大衆がわあーと賛成したのをみて、既存政党ですね、日本でいう自民党とか社会党はビックリギョウテンしてこのままでは緑の党に乗っ取られると、緑の党より先鋭化された環境政策といったようなものを綱領の中へパッと突っ込んだためにですね、次回から緑の党の存在がかなり薄まっただけの話しだと。緑の党があったことによって全体のレベルがパッと上がったということをすごくいわれたんですけど。実にドイツの環境に対する考え方は徹底しております。田舎の果樹園にフットパスを通り入ったらベンチがあって、一般の人達が来て休んでもいいんだという世界をチャント用意するということ。これなかなかのもんです。巣箱が沢山方々にあるんですね、日本の巣箱は学校にあるんですが、一般の果樹園の中にもいっぱい掛かっているんですね。「どういうことか」と聞いたら、「我々は原則薬は使わないんだ」と。「鳥とかに虫とかそういうものを取ってもらうんだ」と。ある時妙な巣箱が掛かっているんですね。「なんだあれは」と言ったら、「こうもりの巣箱だ」と言うんですね。ですから、昼は普通の鳥に虫を取ってもらい、夜はコウモリに取ってもらうという。彼らははそういう具合にして、出来るだけ環境を汚染させない、農薬を最小限に抑えるというその姿勢をですね、常に一般大衆に見せるという作業をやってます。オーストラリアでは牧草地の面積を少なくしてもいいから、植樹を少しして環境的に安定したものにしようという所が各地にありました。ドイツで友達に運転してもらって方々に行きました。所々綺麗なもんですから、感動して「ホー綺麗だな」と言ったら、「あたりまえだ綺麗にしている」と言うんですね。「いい写真が撮れる」と言うと、「あたりまえだ写真になるようにしているんだ」と言うんですね。ようするに、農村部というのはどこへ行っても綺麗にみえるようにしている。だから、樹があったら、この樹がいいと思ったらですね、50年たったらすぐそばに同じ樹を植えるんだそうです。それでやがて75年経ちその樹が倒れる頃になったら、次の樹がかなりおおきくなっているという。あらゆるそう

いう計算をした人間を自然の調和というところの基本的な所から着々とやっている、という世界。これが、都市の人達がですね、農村を見放さない最大の理由だろうと思います。都市の人達が5日間環境の悪い所で働いて、週末になると農村へ出かけて行って、2日間楽しんで鋭気を養って帰る。農村というのは常にそのために最大の力を発揮するんだ、ということがはっきりと具体的に目に見える形でもってなされている、という事にひどく感動しました。そういう世界があるというそれが、逆に言えば多くの市民がですね、いつまでも農業に対し注目し、ある種の憧れとある種の温かい目を注いでいる、という事だろう思っているわけです。

そういう世界を見て来て、では農村と我々の所ではどうするんだろうという作業をいろいろ考えました。主たる研究発表は北大の藤井先生が発表すると思うんですが、少なくとも長い事僕らは原生花園を誤解していたのではないんだろうかと。実は原生花園が国定公園になった時にですね、どうも原始花園というふうに錯覚したグループがあるんですねえ。イメージにおいても原始花園と錯覚したらしくて、そのために規制がどんどん出てきたんですね。例えば、牛を放してもよいが薬を使ってはいけない。当時ダニ熱が小型ピロプラズマ症が出たもんですから、何としても僕らキチッとしなければいけない。それでは「火を入れたい」と言ったら、火を入れる事を禁止されたんですね。それじゃというので薬浴をしようと思ったら、薬を使うことを禁止されたんで、それで僕所長のとき腹立てて、牛を放すのを止めてしまったのですね。止めたとたんに、どんどんどんどん原生花園は悪くなってですね、あっという間に雑草に被われてしまって、花を見ようと思っても見れなくなったんですね。そこで、再度もういっぺん見直そうと調べてみると、実はあそこは適度に、SLが走ると春先になるとパーと適度に火が入って、火が入って実にうまく焼けちゃうという。焼けちゃうことで上にかぶさっている雑草が取られてですね、下からいろんな草が、それと同時にですね、家畜が入ることによってアルカロイド性の、アルカロイドを沢山含んでいるものは家畜が食えないものですから、ものが必然的に残る。それが実は花だったということが、後になって解って来たんですね。バカみたいな話しですが、実は野火と家畜が入ることで原生花園というのは作られたものである、ということに途中で気付いて、何回も僕らは具申したんですね、火を入れてくれと。頭の頑固な官僚達がやっと5～6年前から、ちょっとぐらいならと認めてくれたのですね。確か始めは3ヘクタールぐらいしかやらしてくれないんですね。ようするに家畜が入ることでそういう世界が生まれたという事です。これでなかなか問題があってですね、例えば野鳥が丁度産卵をしない時期にやると。微妙なんですね、雪が融けて乾草して、なおかつ野鳥の営巣直前にやるという、こう微妙なタイミングのために、野鳥の会も参加してですね事前に調査をしてやるわけですね。実は、花は我々が想像したより綺麗になるという事です。そういう世界があるという事をもういっぺん農村部においては認めて欲しいと思っております。花は毎年やればやるほど綺麗になっています。それはある意味では証明されてですね、今は実験的に馬を入れたりしています。そのうち成果が出てくると僕は思っています。少なくとも、我々農村というのは何もしない世界の部分と、やっぱり人と環境という間にある種の約束事とか作業がやはりちゃんとあるということが、皆が認め合う時代だろうかと僕は思っています。

もう一つ小清水でやっている作業は、農薬という物をもう一度考え直そうということをやっています。僕は長い間野生動物の傷病鳥獣というものを預かっているもんですから、沢山僕の所へ持ち込まれてですね。ある年41羽のこむく鳥がいずれも農薬中毒と思われる症状で持ち込まれたんですね。それが、いわゆる農村をもういっぺん見直そうという作業の始まりだったんです。農薬については、これはタブーです。日本の中で農薬を語るのはダブーだといって、後から殺されるという噂があって、ジャーナリストの人も皆会う度にわかったことだが、データ的には皆知ってたんだけれども言わない。面白い世界なんですね。これはやがてアメリカが戦略的に公開するだろうと。これだけ農薬を使っている日本の農業は環境破壊の元凶になっているんだと。だから日本の農業はないほうがいいというアメリカの次の戦略だろうと、僕なんか思っています。85年にアメリカの新しい農業法を出した時からの戦略だろうというふうに思っています。少なくともその当時はアメリカが2位でした。今はEUが2位ですけれど、むろん1位は日本です。1位と2位の間は7倍です。単位面積当たりの農薬使用量は実は日本は2位のEUの7倍使っているというのが現実です。我々がいわゆる消費者との間のギャップを埋める作業をやっても、もう取り返しがつかない時期になっているのではなかろうかと思うことがあるんです。それでですね小清水でやっている作業をチョット説明します。自然界というのは元々安定したがっている、という一つの理論があるんですね。ようするに不安定になるのを嫌がる。自然界というのは元々土壌菌を含めでですね、安定したがっているというところがある、というところの理論を

利用してですね、じゃより安定するにはどういう手伝いをしたらいいのか、ということでやった作業です。牛のションベンです。四国から貰って来てうちで培養したんですね。ほぼ15日ぐらいで人間が飲めるようになります。大量に土壌菌を含んでいるためですね。いろいろな器具を洗うのに使ったりします。牛舎の中にションベンの出る蛇口とお湯のでる蛇口と水の出る蛇口の３種類の蛇口がある、というような酪農家も小清水にはあります。それで洗ってですね、なるべく基本的には安定したがっている土壌菌の中へ、バリアーの中へ牛舎全体を包もうという作業をやっています。あめ色ですごく綺麗です。飲んでも全然問題ありません。この前石黒さんが来たので、僕は「どうですか飲みませんか」と言ったら、逃げて行きました。今度東京へいったら、「あそこへ行ったらションベン飲まされるから用心せい」と宣伝していました。実に僕は愉快だったんだけど。全然問題のないもの、このくらい安定のレベルの高いものを畑に還元していこうとする作業をやっています。我が町は１万ヘクタールですが、牛が５千頭しかいませんがら、単純計算しても千７百ヘクタール分しか還元する面積はないんですね。それでどうしても有機物がたりないといいうんで、農協が持っていたデンプン工場の廃液のため池を培地に代えました。緑肥の上に播くんですね。土壌菌を含んだものを緑肥の上から播いてすき込んでいく。なぜこういう事をやるかと言うと、我々はやはり農村で少なくとも安定的な、あえて有機とはいわないけれども、少なくとも農薬を５割くらい減らせるシステムを確立したい、という世界をやりたいということをやっているんです。我が町は今４千ヘクタール、１万ヘクタールの中の４千ヘクタールですから、農家では140戸前後が参加しています。450戸ですからだいたい⅓の農家が参加して、少なくとも４千ヘクタールぐらいを、より有機化するという作業を僕らは進めている。農村が持っている作業としてはこういうものを我々が示すとかですね、作業としてやることも将来の農業を都市の人達に理解を求めるのに、ひどく大事な事だろうと思うわけです。よく農村へ行きますと、青々とした所に赤いジャガイモ畑があるんですね。これは消費者もよくないんですね、大きいのが嫌だというもんですから、ほっとくとジャガイモが大きくなるからホルモン剤で枯らすわけですね。皆が来て「何ですか」と言うから、「やあ、あれはこれこれです」と言うと、「じゃ枯葉剤ですか」と言うんですね。皆ぱっとベトナムを思い出すんですね。少なくともその世界に対してチャント答が出せる世界を作りたいということが、我が町の人の方針みたいです。

やはり僕ら草地というのは単純にパットやる草地ではなくて、昔からあったような蹄耕法みたいなものを、もっと見直して欲しいと思うんです。これは小清水にある水上という牧区で、かなり広い面積で蹄耕法をやっています。切り株を残すだけでですね、実に沢山の動物が残っているといいうことを是非紹介したくて。ちょっとしたそういうものを残してくれるだけで、全然違った世界が実はあるんだと。確かに作業としては、効率としては少し悪いだろうと思います。しかし、本当に効率的に悪いものが悪で不必要なのか、もう一度見直すチャンスになっていると思います（スライドありがとうございました）。

ともかく僕自身いろいろな事を見て来てですね、みんな誤解してると思うんです。一番の誤解はですね、レスターブラウンの報告で世界は食糧危機の時代が来るから、もうチョット努力すればやがて日本の農業も再度見直されてですね、かつてのいわゆる戦後のように米を渡せば絹織物一反貰えるようなことが来る、と皆思っているけれども、少なくとも私はそれはないだろうと見ています。アフリカのある人間に聞いてみると、日本がもしお米が余っているから只でもってアフリカへ寄付するといっても、途中の運賃だけをアフリカで負担するだけで、アフリカで作ったり、買ったりした方が安くつくんですね。この現実から見て、少なくとも先進国は延々と食糧は余り続けるであろうということが、ここ数年集まって盛んに論議しているグループのほぼ定着した意見じゃないかと思っています。それを何とか切り替えるためには、少なくとも農村というものが都市にとってなくてはならないものにするしかない、と僕は思っています。農村というものが都市にとってなくてはならないものにするためには、農村環境というものをやっぱり総合的に組直しをしなければならないのではないか、と僕は思っております。

僕はだいたい落ちこぼれた獣医でして、写真家になろうと思ったら姉がおまえ写真は止めた方がいいんじゃないかといって、物を書こうと思ったらもの書くの止めた方がいいんじゃないかと。そういう者が言うんですから、半分ぐらいは戯言ですけれども、是非一度ご検討されたら一番うれしいなと思っています。長い間ありがとうございました。

**司会（福永）**

どうもありがとうございました。最後に「風土に生かされた家族農業」と題しましまして、小出清信さんにお話しを伺うわけですが、シンポジウムのしおりに小出さ

んのプロフィールが書かれております。現在、中標津町で酪農を経営されているわけですが、小出さんは高校3年生の夏休みに友達と二人で実習に、北海道の現在住んでおられる根釧原野に、熊本から来て1ヶ月ほど牧場にいたということです。当初は熊本県の阿蘇で酪農経営をやりたかったということだそうですが、北海道に来まして、広々とした牧草地で酪農経営をやってみたいと、まあ、無から出発して自分自身を確かめてみたかったんだ、というお話しでございました。熊本県立阿蘇農業高校を卒業になってから、札幌近郊の牧場で5年間、さらにオーストラリアの肉牛牧場で1年間実習されて来て、その後中標津町の牧場で8年半牧夫さんとして働かれ、そして、自分の実際の経営の場を設けたということでございます。現在は2男2女と奥さんの6人の家族で、家族経営をされていると。家族とともに自然から喜びを実感出来る今日この頃であるということです。現在経営されている中で、今日は現場のいろいろな問題点などを含めた、将来に向けてのお話しが聞けるのではないのかと思っております。それではよろしくお願いいたします。

**小出**

初めまして。道東の中標津町から酪農に携わる現場の人間として、少し現場の声を皆さんにご紹介したいなあと思いまして。大変不慣れですけれど、前に語られた3人の著名な方々に比べれば本当につたない者ですけれども、一言語らせていただきます。最初に現場のスライドを少しやりまして、その後少し話したいなと思います。スライドお願いします。

昭和61年ですか、今から約9年前に入植の機会がありまして、皆さんご存知だと思いますが当時リース牧場がはやってまして、その2期生ぐらいです。4年間そのリース牧場を経営しまして、5年目に買い取って自分の物になる制度なんです。この看板は前にお世話になった親方が書いてくれた看板なんです。これは現在のわが家なんですけれども、入植当時から植林を施すようになって、この様に白樺とか楡の木が沢山になり、9年経つとこの様に大きくなったんです。春になるとアカゲラがコツコツと春を告げまして、カケスで農作業が始まり、秋には又野鳥がくるという、音鳥を感じるような生活を送っております。僕もうまくはないんですけど少しかじる程度に写真をやっています。これは大変感動した写真で、真冬の2月の風景なんです。ちょうど湖面がモザイク模様に凍ってファンタスティクな世界です。道路から歩くスキーで30分くらいかかって行ったのですが、もしよければ来られる時は歩くスキーでも持ってきてください。うちの長女が小学校1年の時自分の力で学校まで5㎞の道のりを1人でテクテク歩いて行きました。力強い歩き方をしているということで写真に撮りました。チャッピーという犬がいまして、家族同様に暮らしています。冬はあまり遊ぶ所がありませんので、家の前にトラクターで雪を積み重ねまして子供達が遊んでいるところです。最近機械化が進みまして、こういう家族的に作業をやる風景がなくなりました。わが家ではわざと機械化せずにこうやってバッケトミルカーで子供達と楽しくやっているんです。こういう作業を一緒にする事により、子供達とのコミュニュケイションというか、今日学校でどんな事があったとか、友達とどんな事をしたとか、本当に乳搾りながら楽しく語ってくれるんです。最近の企業的酪農の中では分業といって、お母さんが乳搾りしお父さんが糞出しする、という現状になって来ているようです。一番下の子供も少しずつ牛舎に出てくるようになっています。わが家の春の放牧風景なんですけれど。技術者の方に言わせればこのタンポポは非常に草地管理が悪いということで叱られるんですけれど、わが家ではメルヘンの世界であります。5月中旬から10月頃まで朝晩放牧しています。だいたいうちの牛は搾乳時間になると帰ってくるんですけれど、これはたまたま牛の機嫌が悪く帰って来ないので、子供が追っている風景です。道東地区はまだ野生の動物が沢山いまして、わが家にも沢山やって来ます。わが家の後ろに林がありますして、その向こうに川が流れています。やはり、野生の動物は川ずたいに来て林を通って現れるということで、出来るだけ木を伐らずに林を残しているという現状です。ちょうど農作業を終えましてお母さんが子供達を連れておんぶして帰るところです。今なかなかこういう風景も見られなくなりました。夏の乾草を収穫している風景ですが、このトラクターは昔ので25年くらい経っている。後ろのテッターという草を混ぜる機械も20年経っています。古い物を大事にしまして、今でも使っています。わが家の越冬飼料作りの中心はほとんど乾草作りです。何でかと言いますと、やはりその牛が健康で飼えるということですね。乳にはあまり還元してくれないんですけれど。健康な牛がこの草を食いまして、ウンコを出して、その乾草の残りとウンコとを混ぜまして、それを3年ほど切り返していい堆肥が出来ます。表面散布により草地に還元しまして、草地の維持に務めています。そして、乾草を作ることによって、水分が少ないものですから機械の故障が少ない。そういうことで、トータルバランスでうまく経営がいく

というような現状です。わが家では4年前に私が馬好きでドサンコを買いまして、子供達が世話しています。夏場はなかなか乗る機会がないのですけれども、冬場になるとこの馬の背にのって近くの農家にお茶を飲みにたまに行っています。毎年そばを作りまして、手製のそばを暮れの31日に手打ちにしまして、毎年年越しそばをしております。子供達とともに収穫しまして、楽しい風景です。釧根地域はなかなか作物が採れない地域なんですが、今年豆を作りまして、豊作で喜んでいる姿です。わが家の暖房は薪に頼っているんですね。そして薪を焚く以上に植林を施すようにしています。今ではリサイクル出来るぐらいの面積を持っていまして、このように秋ぐちになると子供達が手伝って薪の作業をします。わが家には1カ所しか部屋に暖房がないのです。薪ストーブがあることによって子供達がみんな暖かい所に集まって、まあ昔内地で見られた炬燵みたいな、あのような風景が現在のわが家の冬の風景というか、子供達の語らいの場です。これは雌阿寒岳に登った時の写真ですが、春と秋には家族とか部落の人達などと一緒に登山をします。最近ですけどチーズ造りに挑戦しています。三友さんが、農家の人なんですが、函館の農家から習ってきたというゴーダチーズの作り方をわが家で農家の主婦の人を集め教えているところです。ヨーロッパでよくみられるゴーダチーズがやっと技術的にも確立されまして、やっと出来ました。ものすごく感動しました。自分の搾った牛乳からこういう4kgぐらいのゴーダチーズが出来るという事で、本当に毎日豊かな生活をしています。中標津町開町50周年記念事業で文化会館がオープンしまして、札幌交響楽団を呼びまして行った町民200人による合唱に、家族ぐるみで参加しました。また、毎年国際交流の留学生を夏場10日ほど受け入れて8年ほどになります。次の写真は自分の趣味としての写真の世界を表現したものです。これでスライドは終わらせて頂きます。

私は熊本の阿蘇地方の農家に生まれまして、わが家にも牛がいまして小さい頃から動物と接する機会がありました。この繋がれている牛を阿蘇の広々とした大地に自由に放牧してやりたい、という思いがありました。高校生の夏に友人と2人で熊本から現在住んでいる中標津町に実習に出かけたんです。その当時は今と違って飛行機に乗る身分でなく、列車を使いましてトコトコ3日ぐらいかけて来たんです。今思えば、そのトコトコ3日かけて来たということが、今現在やっていることにつながっているかなと思うんです。やはりある程度時間をかけるということ、成熟させることではないかと思うんですね。何事においても。中標津町につくと、本当に果てしなく広がる草地の大地と悠々と戯れる牛の群れ、いく網にも延ばされた真っ直ぐな道路、それに沿うカラマツ林、赤や青のキング式牛舎とサイロ。全てが本当に雄大さと自然との調和のとれた風景が異国を思わせる。感動をおぼえました。私の育った阿蘇もスケールの大きな所ですけれど、本当にそれを上回る自然の偉大さと風景の素晴らしさ。1ヶ月間でしたけれども酪農文化に触れ、人々も本当に温かい人々で、親しみのある人達と家族の触れ合いを持つことができました。ある時部落中の人達と牛の見回りをしていたお昼の時間に、どこからかブリキのトタンの端切れを持って来ました。そこら辺のマキを集めて、肉いっぱいのバケツを持って来まして、ダイナミックなジンギスカンというのを初めて食べたんです。まあ、あの時の味というのは最高というか、今でも本当にあの味は忘れません。当時見た酪農風景はその機械化が進む中でも、自然と調和のとれた営みの中に、その自然の法則を越えないものがありました。それとその温かみのある手作りの農場が感じられまして、私にとっては今でも頭の中に焼き付いています。その当時お世話になった、その地域では大きい農場であった、その規模と放牧中心の形態が今のわが家の姿であります。

私は高校卒業とともに自分の描いた夢を実現させるために、何とか親父を説得しまして、北海道の札幌の近くの牧場に実習に行き、かなり夢と現実とは厳しかったんですけれども、何とか5年半ほど貫き通しました。ある機会があり、その牧場の親方がお世話になったオーストラリアの牧場に、「実体験をしたい、どういう農業文化をしているか触れたい」という思いで、オーストラリアに行ったんです。メルボルンの近くのベネイラという町に行ったんです。僕の行った農場は大人が手を伸ばしたぐらいの大きい樹が前に幾つもあって、そこに野鳥がきまして朝から晩までギャアギャアと、そのオウムみたいな鳥がいたり、野生の動物、カンガルーやハリネズミとかノウサギ、カモノハシとか、そういう野生の動物がいたる所に見うけられたんですよ。向こうの夏は日が沈むのは9時頃でありまして、農作業がおわるのは5時頃なんですよ。そして、テニスをやったり泳いだりクリケットをやったり、そういう時間を2時間ほど過ごしまして、7時頃からじっくり2、3時間かけて夕食をとるんですね。その夕食でも奥さんが十分時間をかけた手料理が用意されていて、本当に食文化の継承がなされているように見うけられました。確かにオーストラリアの農業は経済的には厳しかったんですけれど、農民が自然を受け入れる豊かさと農業に対する誇りを持っていたように思います。まあ、そういう思いもしまして、将来的にさらな

る思いが募りまして、この際自分で牧場を持ちたいということで。親はかなり反対したんですけれども、僕の説得に押し負けまして「おまえそんなにやるんだったら自分の力でやれ」ということで、中標津町の牧場にお世話になることになったなんです。約8年半ほど親方とともに汗をながしまして、かなり大きな牧場でいい親方と家族の温かい触れ合いができました。

その間私も年頃になりまして、5年目ぐらいですか27歳で結婚しました。昭和61年の6月、忘れもしない本当に自分の夢が、周りの支えもありまして、叶いまして、もうその日はその感動と緊張との複雑な思いが交差して。親方から牛を貰たんですよね。農協の車を借りて牛を積み込む途中で押していたのはいいんですが、パッチと足のほうに電気が通ってきたような思いで、アキレスケンを切りまして、その日からすぐにギブス生活で病院に1ヶ月ほど入院しました。その間、牛の頭数も少なかったので、うちの家内と子供がなんとか支えてくれました。また、先ほど紹介したように、その年の12月に牛舎の屋根が大風で飛びまして、160万円ほど出費を余儀なくされました。まあ、それを期に植林を毎年家の前に施すようになった、ということですね。入植して借金という重荷がありまして、近道をしようと思いまして、規模拡大や生産性の向上に力をいれたんですね。いれたはいいんですけれど、やっぱり忙しくって、そのうち家庭内のイザコザや牛が乳房炎になったり故障したりして、大変な思いを当時したんです。その時家内が詩を残しているんですね。チョット紹介してみます。“みどりの乳は悲しい　今日もみどり色の乳を搾る　半透明なみどり色に凝固した乳が異臭を漂わせ　乳房より押し出される　あなたは　この痛みがわかりますか　目尻よりこぼれる涙　わかるよ　私も母親だから　熱のこもった温かさ　バンバン張った乳房　ガンバガンバとさすってやる　数日続いている40数℃の熱に頑張っている牛　人間なら片方乳房をとることもできるが　でも　わたしは廃用だ　せめて元気になって　うまい物をたくさん食べてね　胸が熱くなって　泣けてきた”まあこういう涙のこぼれるような詩を、家内が当時こういう思いで過ごしたことが今でも伝わってきます。そういう力を入れた農業をずーとやってまして、だが何かこれじゃうまくないんじゃないかということで、路線を変更しました。牛を放牧して自由に春から秋まで採食して、冬は乾草を給与して、健康的な飼い方を求めまして、その結果として経済がついてくるようになった、という現状なんです。

皆さんは北海道の牛乳をイメージされると新鮮でおいしい牛乳というイメージではないかと思いますけれど、現状はそうではないんですね。周りから企業的酪農が要求されまして、沢山搾ってよりコストを削減しなさいという、ましてかなり現場から離れたような農業が営まれている現状であります。でも、農業の基本原理は生命のある物質を扱うことにあると思うんですね。肥沃な土は1㎤の中に何十億の生命が宿っていると思うんです。工業の原理は生命のない材料を使ったもので、それは使い易く生命のあるものを排除することによって、より多くの物を生産し易い。だから農業と工業とは違うと思うんですよ。この農業を工業の質として見なすようになった時、そのリサイクル農業のバランスが破れまして、現在に至っているような状況です。現在は科学が進んでそれを補うだけの多くの技術がありますけれども、やはりそれに伴う多くの化石燃料の浪費につながると思うんですね。そういう中で、感動は人間を成長させると思うんですね。今年を振り返って見ますと、そのいくらかの感動がありました。最近では、スライドに見せたように、チーズ作りに2年前から挑戦してきたんですけれども、本当に自分の原料からあのようにチーズが出来たという、家族共々本当に感動しました。もう一つ一番感動したのは、今年7月中標津町会館がオープンしまして、町民の合唱団200人によるカンタータの「土の歌」を、家族共々に歌いまして感動しました。約1年半ほど練習に通いまして、牛舎が7時頃終わりまして約30分ほど町まで通って練習しました。その「土の歌」の内容は農民と農業の営みを讃える歌と、あの広島と長崎の悲惨さを二度と繰り返さないための提唱でありまして、最後に大地賛唱で終わります。私たち農民が春から夏、秋、冬と1年間携わって、そういう中で農業の営みを自然の中から喜びを感じる。そういう思いが「土の歌」に現れまして、涙がでる思いでした。

私にとって沢山牛乳を搾れば豊かになると思ってましたけれども、こんなに豊かな農業生活が足元にあることに気付くことが出来ました。将来はどうすればよいかということにないますけれど、今の農業を樹が成長するように少しずつ、一歩ずつ広げれば今後へつながって、自信はありませんけれど、いく確信が持てます。現在のわが家は経済的には十分ではありませんが、十二分なる日常の糧が与えられて、家族共々に楽しんでいる昨今であります。これをもちまして私の語らいを終わらせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。

**司会**

どうもありがとうございました。以上をもちまして4人の方の講演を終わらせていただきます。

北草研報30：29－39（1996）

## 北海道草地研究会30周年記念パネルディスカッション

# 豊かな文化を育む草地を目指して

パネラー　高畑　　滋氏、加藤　幸子氏、武田津　実氏、小出　清信氏、
　　坂野　　博氏、萬田　富治氏
司　　会　清水　良彦氏（サポート兼パネラー、島本　義也氏、福永　和夫氏）

**司会**

不慣れでございますので北大の島本先生と帯広畜産大学の福永先生にもサポート兼パネラーという事で参加をお願いしております。よろしくお願いします。それではただ今から「豊かな文化をはぐむ草地を目指して」というテーマによるパネルディスカッションを開催いたします。始めにパネラーの皆様をご紹介いたします。先ほど色々な角度から貴重なご講演をいただきました高畑さん、加藤さん、竹田津さん、小出さん、この４名の皆様には先ほどご紹介していますので、改めてのご紹介を省略させていただきます。それから、新たに坂野さんと萬田さんに加わっていただいております。

坂野さんは長い間北海道開発局にお勤めになり、北海道の草地開発や農用地の基盤整備に携わって来ました。退職後は郷里の釧路市に戻られ、自ら家畜を飼いながら、また釧路市の市営牧場の嘱託として、また技術士として農業コンサルタントの仕事も行っている、まだ現役のパリパリです。それでは坂野さん、今日のテーマで日頃考えておられることを始めにご意見お願いいたします。

**坂野**

坂野でございます。今日のテーマ「文化と草地のかかわり」という事ですが、私、草地は一つの文化基盤であると言うふうに理解しておりまして、人々がそこにいろんな面での価値を見いだしていくという所に、草地の文化の関わりがあるように思います。この様な視点から次の２点について私から申し上げます。

その第１点は農業土地利用としての北海道の草地が食文化の面で積極的にそれを支える役割を担ってたのではないかということです。わが国は半世紀前の生存厳しい飢餓状況を抜け出して、国民一般の食卓が豊かになりだしたのは、昭和30年代の半ば以降と思いますが、そのころから生命維持の食は文化としての食というように様変わりしたのではないかと思っています。この食文化の一方の主役となりました牛乳、乳製品や牛肉の消費拡大、これもこの時期から目覚ましいものが在りますが、この国内需要増大に対する北海道の供給量あるいはその生産基盤である開発草地の伸びは実に見事にこれに対応しております。したがって、農業土地利用としての草地はこのような食文化の変化を支える役割を担ってきたと言えるかと思います。ところで、この草地開発の経過をみますと、その６割ないし７割は昭和30年代始めから昭和40年代の末までに集中的に行われております。なぜこの時期に集中的な開発が進められたかといいますと、当時の急速な畜産生産拡大が飼料の輸入増大を招き、国際収支への悪影響が懸念されました。今ではちょっと考えられない事情がその背後にありました。草地開発を国際経済化対応の一つの歯車だったという視点からみますと、円高とか黒字基調という状況にある現代の食文化が、海外農業国の土と水と太陽に支えられているところが多いというのも当然の帰結かなと観念せざるを得ないのですが、それはさておきまして、私は北海道の草地が近い将来極めて意義を発揮するに違いないと考えております。なぜなら、所得向上に伴う食生活の高度化、これは人類社会共通の現象でありまして、すでにアジア新興諸国では始まっております。また、中長期的にはこれがあるいは世界的動向となるでしょうが、世界人口の急増が穀物消費を増大させるという中で、この様な食文化の必然的展開というものを支えていくとすれば、現在の穀物消費型の乳肉生産、これはいずれ壁にぶつかりまして、草食性家畜の根源的能力これを最大限発揮するような生産方式、これが不可欠になるのではないかと考えます。

次に第２点は21世紀型農耕文化に果たす草地の役割という事でございます。従来はもっぱら牛が専有する草地に過ぎなかった道内の牧場ですが、その多くは近頃では都市住民に定着している自然神話という新しい生活文化を支える基盤として機能していることは周知のとおりす。私はこれに加えて最近国際的に関心の高い先ほど竹田津さんも強調されておりましたが、地球にやさしい農業の展開というような視点にたった草地の今後の役割について、特に強調したいと考えております。草地を基礎に行われます農業生産、これはご承知のように元来資源リサイクル農業でして、私はこのリサイクルシステムというものは可能な限り広く活用することで、草地が低投入持続型農業、言い換えますと21世紀に向けた新しい農耕文化というものに大きく寄与するのではなかろうか、と考えております。その低投入持続型農業確立への世界的潮流、これは今や一国の経済国益を越えた文化理念となっていると言っても過言ではないかと思います。わが国がこの理念を貫徹するには、草食性家畜生産は広い適地を持つ北海道が今以上に担っていく必要があり、同時に21世紀型農耕文化確立というような理念に立脚しました草地の重要性、これも益々高まっていくんだろうと思います。ここで肝心なのは先ほども話にでましたが、草食家畜生産に伴う膨大な糞尿を肥効を損なうこと無く処理する、その徹底したシステムの確立が必要で、これが欠けては実効あるリサイクルシステムの実現は不可能ということす。この問題は単に乳肉生産農業者の自覚に待つということだけでは解決できるものではありません。リサイクルコストの直接間接の負担につても広く一般の理解を求めることが不可欠ですが、同時に全ての畜産関係者が家畜糞尿について、家畜公害源発想からリサイクル資源発想へと、そのように発想の転換をいたしまして、完全処理及び完全利用の実戦的方式の確立ということへ向けて積極的な取り組みをこれから一層進める必要があと考えております。

以上、かって草地開発事業を通じまして草地農業の展開に携わってきた者の一人といたしまして、最近特に念頭にありますことを申し述べさせていただきました。

**司会**

どうも有り難うございました。続きまして萬田さん。萬田さんにつきましてはサイレージとか未利用資源の飼料化の研究または家畜飼養の研究者の第一人者として皆様すでにご承知のことと思います。現在農林水産省の草地試験場にお勤めになっております。また、海外における畜産事情に非常に精通されております。では、萬田さん、今日のテーマにそってお話をお願いいたします。

**萬田**

萬田でございます。今日、加藤さんがあの草地という言葉で機械の装置と間違われた友達の話をされて、私まさにその名前を代表します草地試験場にいまして大変恥ずかしい思いをしてます。また、機械の装置ならいいんですけど、私たち時々野生地試験場と間違えられまして、野生地試験場の方がいいのかなと、ここにいろいろ草を播き家畜を飼い豊かな草地文化を作るということで、野生地試験場と草地を模じってもらった方がいいかなと、今聞いていて感じた次第です。

今日４人の話題提供を聞かせていただいて、私北海道に昭和59年から平成６年まで11年いろいろ草地なり酪農の姿を一緒に勉強させていただき、「やあ、また時代が変わってきたんだなあ」というように感じました。ちょうど私が北海道に来た頃はヨーロッパにはもう学ぶものはないんだと、これからアメリカだということで、非常に厳しい市場原理の中で経営の生き残りを賭けているアメリカの先端技術の紹介がどんどん入ってきまして、まさに高泌乳牛時代に突入したわけです。で、その結果現在どうなったかというと、草地離れ、いわゆる草離れが起こってしまって、折角先代達がここまで築き上げた草地が省みられなくなってきている、という実情です。そういうことでこの11年間やってきて、今度来てみたら北海道酪農の内地化が始まっていると、要するに内地酪農になってきていると。果たして北海道酪農、いわゆる草地を活用した畜産、というのは何時まで経っても動揺しているという実情ではないかなと思ったわけです。そこの所を今日４人の話題提供者がそれぞれの立場から提言されたわけです。高畑さんは景観生態学の立場から北海道にはやはり草地が適しているんだと。その草地もただ放置してあるんではなくて、人とか牛、人為的撹乱維持、人為的な撹乱によって維持されていると。となると、そこに生産という視点が入ってくるわけです。その生産をどうするか。加藤さんは作家の立場から余りその拡大されたら困るよと。環境破壊、場合によっては湖沼だとかの汚染、このようにつながる草地畜産・草地文化というものを私達は求めていないと。もっと自然と共生してやって欲しいという提案がなされたと思います。これは東京の消費者という立場から論じられたと思うんですが。また一方、北海道の草地というのはただ北海道だけで独立して在るんではなくて、日本の草地畜産、大きな日本という立地があるわけで、現在内地も北海道も草地を活用している酪農家は生き残りを賭けて産地間競争でしの

ぎを削って、北海道が潰れるか、内地が潰れるかと。そういう非常に厳しい状況の中にあるわけですから。私は今内地に行ってますけども、日本全体の草地酪農あるいは草地を考えたときには、やはり北海道はこの広大な草地資源を最大限活用した酪農なり肉牛経営を展開していただくと。これが適正規模すなわち適正な生産量となって、何も南北戦争しなくても十分やって行ける経営ができるはずであると。少なくとも今後北海道酪農は草地酪農が内地酪農に傾斜しないことを期待しているわけです。

その次に、竹田津さんがヨーロッパの農業というものを生産ではなくて環境保全という観点からいろいろアフリカを含めて話されましたけれども、要は、国なりそういう地域の行政なりがどう国民に支持されるような環境調和型の農業を構築していくかと。これは一人農業者それにかかわる人だけでなくて、国なり道としての政策も大事なんだということを、海外の事例を交えながら大変愉快に話していただいたと思います。我々を含めしょっちゅうヨーロッパとかへ行く機会があるんですけど、海外から来た研究者、草地研究者、畜産研究者が北海道の草地酪農を見てどう感じているか、というのをあまり聞かされないです。国によってどうも評価が違うようです。いわゆる新大陸の方から来た学者はコンサルタントを含めてですね、その人達は目的がはっきりしていますから、いかに北海道の草地酪農をレベルアップするかというきちっとした目的で来ていますから、まあ、その人達のあれははっきりしているんですけど。もう一ついろんな学会とか研究会でフラッとヨーロッパの研究者が来ます。その人達に時間があったら私は北海道を案内するのですけれども、根釧を含めて連れて回るとですね、皆さん一致して言うことはまず糞尿を野積みしていることに驚きます。農村のただずまい（景観）はもうかなわないです。彼らの長い歴史の素晴らしい景観ですね。まあそういう人達は糞尿を野積みしているのに驚く。それから機械を圃場に放置している。それから腐ったロールベールがあちこち転がっている。これは経営も大変厳しいでしょうけれども物を大事にしない。まさに日本の国民性が北海道の草地文化といわれる草地酪農にですね、如実に出てきていると。これは皆さん異口同音に言われることです。それから人によってですね、これはもう工業じゃないですかと。わざわざ国際化の中で低コストでミルクを安くして何とかやって行こうと頑張っているのに、彼らから見たらこれは工業である、カルチャーではない、ということを言う人がおりますね。ですから、外国を見るのも大事ですし、外国から何を言われるか、一つの国ではなく広く世界の国々の人達からの意見も聞きながら、まあいつまでもそれでは如何のですけど、いろんな意見を聞くのは大事ですので、竹田津さんの環境との話しをからめて私なりの外国からみた北海道草地というのを紹介させていただきました。

それから小出さん、小出さんは私はここを強調したかったんですが、今までは北海道の草地開発、酪農の姿というのは如何に生産を上げて行くか、いわゆる経営が目的。しかし、小出さんはそうじゃなくて生活重視、いわゆる収益の追求ではなくて生活を重視する。そして、そこの土地に惚れる、その土地に住みたい。彼のような家族を重視した、生活を重視した経営がおそらく小出さんだけでなくて北海道でかなり今生まれてきていると思います。これが一つの大きな方向になるのかなあと。そして、小出さん謙虚な方ですから自分の経営のこと言いませんけど、我々いろいろ経営調査のデータ見せていただきますと、通常の農家、彼は30頭ぐらいで搾りをやっているのですけれど、50頭60頭の規模に相当する収益を上げている。一頭当たりだいたい37万ぐらいの所得があるわけですね。だいたい倍です。倍くらいの経営をやっている。そして非常にコストが安くて、十分経済的なゆとりがあるのだが、その家族のゆとりだとか文化といっていても、まず経済的ゆとりをきちっとする。そして、その次に時間的ゆとり、これは労働時間の節減ですね。それからいくら労働時間節減しても遊びを、余った時間パチンコしたりまあそれだけではちょっと寂しい話しでですね。小出さんのように精神的なゆとり、いろいろな文化を楽しむ、自分達の趣味を活用する、地域の自然を十分エンジョイすると。そういうことを見事にわずか昭和61年に入植されてここまで持ってきたということは、私は驚異的なことだと思います。しかし、残念ながらまだまだそのレベルだということがもう一方で言いたいのです。それだけいろんな人達が2代、3代なってきてまだ小出さんの様な人達が出てきてまあ皆んなから注目されている。ここに北海道の草地文化といわれるもののまだ私は未熟さがあるんじゃないかということで、小出さんが一つの方向を示していただいたと思います。私ここで問題提起しておきたいのは、今規模拡大で大変投資した人達が大きな負債を抱えてこれからどう経営をしていくのか、そのなかで草地というものをどう活用していくのか、そういう人達がまさに草地から離れていっているわけですね。ここの所を元に戻せないでしょうね。ですから、そこをどうしていくのか、できたらこのシンポジュムでちょっと方向でも出されたらなあと。ちょっと長くなりましたが感想を含めてお話させていただきました。

**司会**

どうも有り難うございました。それではこれからあと１時間ぐらいありますのでシンポジュウムの討議を開催いたしますけど、先ほど会場の皆さんから質問をお受けしましたので、まず質問の方から入っていきたいと思います。

それでは始めに新潟大学農学部の広田先生のほうから高畑先生へ質問がありますので紹介します。「戦後プロパンガスが農村の台所に入るようになってから、森林の薪や木炭を利用しなくなりました。入り会い地のススキ草原も人々の暮らしと密接に関わって維持されてきました。また、松食い虫の害で内地の山は泣いています。人々は山や森に背を向けてしまい自然とのつき合いがなくなったと思いますが、どうしたら元のようにつき合い上手になれるでしょうか。」という質問がありますので、高畑先生よろしくお願いします。

**高畑**

大変現実を鋭く突いたご質問で、まさに私がテーマとしておりました防火林、里山の取扱いということで、私どももそのことについてだいぶ苦慮しておりました。先ほど発表したとおり農家の裏山とか、里山といったようなものも極めて文化的な産物であります。長い間人が関わっている雑木林とか、二次林とかいうような言われ方をしているわけですが、そういう山を作り上げてきて、それが人とのつながりの中で断ち切れておるということは、実は私どもも早くから問題にしておりました。おっしゃるとおり薪炭林といわれるような昔の山というのはかなり薪炭林として適当に切り出して、萌芽という「ひこばえ」から再び30年40年で切れるというような林としてつながっていたわけです。これは低投入リサイクルという山の利用の仕方だったわけですけれども、薪炭材というのはほとんどキャンプ用にしか炭は使われません。薪を使うというのは本当に恵まれた小出さんの所のようにですね、すぐ自分の裏で調達出来るという、それを楽しみとして薪の暖かさを求めるというような人達だけによって使われているというような状況です。これをかつてのように社会全体として使ってゆくというのは大変無理があるというふうに思います。私もそういうテーマで今まで居りました東北の北上山地で、すぐ裏山にかってのアカマツ、御用樹がまじったような二次林を抱えているような所と話し合って実験的にやってみたわけですけれども。実は、間伐するということが如何に大変かというのを実感いたしまして、よほど金にならなければあ～ゆう樹を伐るというようなことはない、ということを痛感したわけです。で、今の所残念ですけれども今の社会において、裏山里山はうまく使って豊かな生活を求めるという所の展望というのは見えておりません。これは草地農業よりもっと難しいテーマではないかというふうに思っておりますけれども。つながっておるわけですね。萱刈場から雑木林、薪炭二次林の取扱いというのはここで切れるという話しではありません。何とか現代でも通用するような、何と申しますか、市場性も持たせながら生活の上でもより豊かなものを取り上げられるような、大変貴重な資源ではあるんですが。何か先が見えないんで研究者としてもまだ暗中模索で実際の場面においても、小出さんのような少数の例はございますけれども、将来を示すような事例も見えてこないのが実態かと思います。どうもお答になりませんけれども。

**司会**

どうも有り難うございました。また、これに関連する質問が出ていますので。全国農業新聞のOBであります、現在フリージャーナリストの増井さんから「小出氏が農場周辺に植林され、暖房に薪を使っておられるのは大変すばらしいと思います。化石燃料に頼らず森林の健全な状況を保つには適度な伐採、間伐が大切かと思います。草地の背後に良い森林がなければ、永続的な利用も良い環境としての草地も保全されないと考えます」。それで質問としましては、「小出さんのように薪を使い、間伐林を利用する仕組みをどうしたら作れるか」。意見として、「草地や畜産を考える際に森林、林業を一体的、総体的に捉えて欲しいのです」。ご意見を添えられております。この問題はちょっと難しいというので仕組みをどうしたら作れるかということですけど、小出さんもし体験上ありましたら。

**小出**

仕組みといってもまだそういう経験がありませんので、ただ中標津町に森林組合という樹を植える組織の団体がありますので、そことタイアップして農家と森林組合の方に国からの補助金で、草地のほうに樹を植えたら何ぼかの補助金がでるとか、そういうシステムを作ってくれれば、もう少し農家もある程度リサイクル出来るぐらいの樹が植えられると思うんですね。すると樹を植えることによって、ただ暖房でなくてそこに群がる野鳥とかが来たり全てのほうに広がると思う。だから、草地と森林という一体化がこれからの農業には必要ではないかという感じがします。

**司会**

有り難うございました。きっと質問者の方もそういうことで日本の農業というのは非常に工業化と同じように効率化を求められる余り、どちらかといえばモノカルチャー的というか１つの農業に対し、徹底的に合理化するというような農業が畜産・林業・畑作・水田等が分裂というのですか、うまく有機的に結びついていない実体があるのではないかと思っていますけど。この辺について何か特に畜産と他の産業との関わりで、坂野さんどうですか。

**坂野**

今私は薪を焚いているのですけれど、小出さんのように薪炭林を持っていないものですから、何とかあちこち手を回して毎冬の準備しているのですけれど、薪についての流通機構がほとんどなくて、手に入れたくても手にはいらないのが実体ということがひとつありますね。それから、薪を焚くのはいいんですがどの程度の人がどの程度使うかによって、逆の問題が出てくるのではないかという問題もあるわけですね。自然と親しみ薪を使う。僕は非常に楽しんでいますけど、それをどうゆう局面で押し進めるのか、という問題もあるんじゃないか、との感じもありますけれど。

**司会**

この問題まだいろいろあると思いますけれど。特に草地化による森林の問題というのは中標津の方でも結構問題になっていますし、標津町なんかはかなり最近そういうことで防風林と保安林を積極的に植えようとの運動も行って、いろいろ国の整備に乗った事業も始めていると聞いています。そういうことで、標津の町長さんが言っていましたけれど、昔はどこの農家へ行っても国後島は見えなかったけれど、最近はどこからでも見えると。それだけ森林が切られてしまったということで、もう少し国後島が見えないような町にしなければならない、なんて言ってましたけれど。やはりこれからそういう面で森林と草地の問題もいろいろ解明されていかなければならんと思います。まだ沢山質問がありますので次に移らせていただきます。

先ほどの新潟大学の広田先生のほうから加藤先生への質問があります。「北海道の草地農業は東南アジアでは立派に発展した良い事例のひとつです。地中海性の血の濃い牧草を導入し、同じ地域出身の家畜を入れて100年掛かってここまで来ました。しかし、現状は技術万能スケールメリット将来思想から抜けきれないでいる例が多いのです。また、負債を抱えて生きる望みを失いつつある農家もあります。畜産は本来心豊かに祈りの日々に満ちた信仰心が必要なのではないかと日頃考ております。家畜の生活の中ではそうした心の柱が必要で、次の世界までにアジアの東の端に草地農業が続くことを願っております。クラーク先生、黒沢酉蔵先生が健在であれば何とおっしゃたでしょうか、アドバイスをお願いします。」ということで加藤さんお願いします。

**加藤**

大変困ってしまいました。大先輩のクラーク先生に成り変わることはとても出来ませんので。そうですね、北海道からいわゆる草地がなくなって牧場の風景がなくなっいたら本当に寂しいだろうと思うんですね。やっぱり北海道のひとつのシンボルであるから。これはとても大事なことなんですけれども、今までやっぱり言えなかった経緯があると思うんですね。開拓時代から今まで大変苦しい苦しい思いをされて切り開かれてですね、今でこそ樹を植えようという発想がありますが、その頃、開拓初期の頃は厳しい状況の中で、すごい巨木の根をもう皆で何日も掛かって掘り上げるような生活をされて開拓された。そうやって、本当に血の滲むような努力で土地を拓いてらした。その方達の努力に対して間違っていたとかそんなことはとてももちろん言えるわけはありません。今のような時代になってきて初めていったいこれからどうするかという問題になってくるのではないかと思うのですね。今日いろいろな先生のお話がそれぞれ草地をそういう方向、より良い方向を目指して維持していこうというお話しをしてくださったので、私も大変勉強になりましたけれども。それは草地の話しだけではないんです。北海道のすべてが100年かかってきたわけですね。100年というとかなりの年月なのですが、ここでもう少し草地を文化としてみてみたらどうでしょうか。あの～ただ建物を建てたりすることが文化ではないので。それは札幌などの都市にも共通して言えるんですけれども北海道は文化的にはまだですね。あの私は自分が北海道生まれでいわば完全な道産子ではありませんけれど、10年間少なくてもいましたし、一番学生時代のいい時に、そして北海道が大好きで来たわけですから。それでその、そういうこともチョット言っていいと思うんですけれど、まだ何かが未熟だと思うんですね。竹田津さんの写真を拝見しますと、本当に北海道の風景は綺麗ですよね。自然に関しては。ヨーロッパでは都市も農村もひとつの美的価値基準というのが皆に浸透しているような気がしますね、個人個人の問題として。それぞれ個人個人の美

的基準を逆なでするような建物が建ったり、物事が起こったりすると、まわりからかなり嫌な目で見られます。そうしてしまった人は失敗したことを反省して、今度は自分の文化的見直しをするというような精神状況の中で、どんどん文化というのは深まってきて、それで今のように自然にあのように調和のとれた風景ができているんだと思うんですね。それは農村だけでなく、パリの街を歩いていても、ロンドンの街を歩いていても感じます。それぞれ個性的ではありますけれども、本当に歩いていて楽しいんですね。ところが東京の街を歩いていてもちっとも楽しくありません。特に昔の家並などが残っている所は別ですが、今風の新しい家がどんどん建っている所なんか本当に歩きたくない、散歩なんかしたくないような街に変わりつつあるんですね。それと同様にやっぱり北海道の場合でも、私が前いた時はかなりいい雰囲気だったのが、私が知っている頃からは30～40年しかたっていないのに、ずいぶん薄ぺらになってきたんではないかという気がするんですよ。こういうこと言って怒られてしまうかもしれませんが、たとえば、まず感じるのは汽車に乗ったりして来ますと家がみんな同じに見えます。いわゆる新建材で皆よく似た色、同じような建て方で、もうまるで同じ家に同じ顔して人が住んでいるんではないかと。本当はそうではないんでしょうけれど、そういうふうに思えてしまう家ばっかりで。それは北海道という土地や気候の厳しい条件に合う建材を使って、そしてなおかつ安価であるという点で、あのようになってしまうのかもしれませんけど。それがすごく残念なのです。嫌な、悪いんですけど、ひとつひとつの家のはなしでなくて、全体的に見た場合の北海道の文化度の話です。もちろん札幌を含めた話しですよ、札幌の駅前の安っぽい百貨店なんかも含めてですよ。チャチないわゆる童話みたいなイメージでね、札幌を、北海道を構築してもらいたくないと思うんですよ。北海道を何んだと思っているんだという感じがして。そういう悪影響はむしろ内地の方の今はやりの建築からきているんではないかと思うんですけど。どちらにしても、草地文化も含めて北海道のあらゆる文化の質を深めていく方向でこれからいってほしいと思います。そのためには、個人個人が自然と文化のある生活に敏感でそして楽しむ方向に、ただお金でなくて生活の内容を豊かにして楽しむという、そういう方向に皆が向かえばですね。やっぱりもうちょっと個性的な文化が、北海道らしい自然が、再生されるのではないかという気がしております。今のご質問にぴったりした答かどうか解りませんけれども。

必ずしもヨーロッパのまねをするのが良いと思いません。日本人とは違いますから、向こうの人の感受性は狩猟や牧畜、肉食民というか、牧畜民というかそういう長い歴史に培われてそういう風になってしまったので、環境を管理するということに対してもう全然抵抗ないんですね。その点私達日本人は自然を管理するということに対しまだ馴れてないのです。だからそれはまた逆に良いことであって、適当にやっぱり良いところを学ぶという形で、これからは環境管理の方向に進のではないでしょうか。だから日本人の良いところである、自然に対して高圧的にならないような気持ちを持って、しかも、しなければならない事はしていく、というふうに持っていかれれば自然も文化もですね、非常に面白くなって来るんではないかなと思っています。そういう意味で北海道の草地文化の未来についても、大変関心があるのです。

**司会**

どうも有り難うございました。まだ質問がありますので先に進めさせていただきます。酪農学園大学の篠原先生から質問です。「乳肉生産以外の草文化特に環境保全や美しい景観として草地の文化的評価について、金銭決裁の可否について各先生方に質問いたします。世間には文化と文明の吟味として、文明は人間社会を操作する装置であり、文化は人間がその装置を用いて生産した精神的価値である、という定義があります。草地や森林田園景観はその生産物である乳肉や材料としての評価は金銭決裁されておりますが、もう一つの評価ポイントは環境保全や景観に対する精神文化としての評価があると思います。そこで質問ですが、この精神文化を含む環境保全や景観に対する具体的金銭評価をどのように工夫すべきでしょうか。先生方のお考えをお聞きしたいと思います。私の考えでは環境保全直接交付税のようなものを創設して、観光する人と観光を保全する人とのバランスを主権在民の国民国家の観点から、金銭決裁システムを工夫すべき時にきていると思います。いかがでしょうか。スイスの美しい自然、牧場、お花畑は国民皆兵と税金で交付税バランスをはかっていると聞いています。平和主義をとる日本憲法の基で草地文化の生産と消費文化の決裁をどうとるべきでしょうか」という大変長い質問ですけれど。これは竹田津さんに外国のこともございますのでお願いします。

**竹田津**

どうなんですかね。一つは日本の場合は農業に対する総補助金額というのがあって、その振り分けがはたして行政サイドでもってそれを妥協してくれるのかどうかと

いうことは大変難しく、では政治家がそれをちゃんとやれるかということ、いろんな人に聞いてみると、どうも政治家もはたしてそれはやれないんではないかということもあってですね。ですから、それで総額以上にその新たに補助金を払うかという事になると、はたして国民のコンセンサスが取れるかどうかということですね。だから、いま例えば農業災害法等にでている補助金なんかを例にとってみても、要するにあれは質とかそういうものは一切問わない、方法論も問わない、要するに量の問題で処理をしている。それから、農村におけるたくさんの補助額を調べてみると、どうもそれは土木建設業にいっているのが圧倒的に多いという。そういうところの組換え、枠の組換えが時代が後押しをしているんで多少いくんでしょうけども。まあ、そういうことにいくまでにはたして農村が残るかというと、この時間との競争になっているのではないかと僕は思います。

要するに、基本的にいえば今までは農業というのは比較的借金が多いから離農するという形をとってますけれども、現在は借金が全然なくて離農するという形をどんどんとりつつあります。１番多いのは後継者不足とかいう問題もありますけれど、後継者がおってもですね、そういう傾向がある現在をみると、先ほど言いましたように農村からみると、いわゆる都市を中心とした生活の基盤そのものは決して良くはないけれども、都市へ相変わらず人口は集中する。しかし、少なくとも東京は大きく成り過ぎたから嫌だといっても、東京から北海道へ来るかといえばなかなか来ない。北海道へ来る場合はほとんど、この前石黒さんなんかと話して、北海道へ来るのはいっぱいいるけれどよく聞いてみると札幌へ来るんですね。要するに、都市間に来るだけの話しで、農村にはほとんど帰って来ない。でどうなるかというと、女の人が一生に産む数は東京都内は1.1人なんですよね。日本平均1.5人というけれど、東京は極端に低いわけですけれど、どこで供給するかといえば地方が全部供給するという。今はこういう難しい世界になっているのだろうと思う。ですから一番難しい世界になっている所でいま可能とすれば、相当大きいなんて言うんですかある種のパニック、クライシスというんですか、ある種の今まで40年から始まった一つの社会概念みたいなものをいっぺんひっくり返してしまうみたいな。ひっくり返してもしかたがないんだというくらいの皆の覚悟ができれば、僕はそこへいくと思います。けれど、それでない限りは、農村が無くなってしばらくたって考えるのではないでしょうか。そんな感じを受けます。

**司会**

これに関連したような質問がありますので合わせてお願いします。草地試験場の吉田さんから「好ましい農業のあり方を現実のものとするためには、農業者と消費者双方の意義の向上が必要であると思います。一部の農業者や消費者の中にはそのことに気がついている人もいるが、多くは目覚めていない。多くの人が農業の重要さに気がつく事は現実のものとなるのだろうか。そのために農業サイド（農業者または行政）は何をしたら良いのであろうか」というご質問ですけど。これは萬田さんにお願いします。

**萬田**

おそらく今吉田さんから聞かれた事は一般論としてどこでも論議されていることなんで、私はあえて北海道という立場からみてみたいと思うんですけれど、私も北海道に居ましたから。北海道にいる人達は、北海道は非常に冷涼だから農薬の使用量も少なくてクリーンで、内地の人達は北海道の農産物をおいしいと思っているということで、まあ消費者の方に顔を向けたいろんな野菜だとか花卉だとかいろんな方向に農業は多様化してきてます。しかし、北海道の中で消費する立場であればまだいろいろやり方がありますけれど、多くは内地へ出荷するという点で畑作農産物、主要な農産物ほとんど自由化の中で相当まいってきてますから、そういうところに活路を見い出してやっているんですけれども。非常にクールに見れば、内地から見ればニュージーランドもカナダも北海道も非常にクリーンで一緒なんですよね。先ほどのスライドの美しいこと、まあ、あのような所で作られた農産物の方がブロッコリーにしろニンジンにしろ安全で、ポストハーベスト運送中の処理の問題は横に置いておいてですね。まあ非常にクリーンであると、そしたら別に北海道でなはくて、ニュージーランドのブロッコリーだっていいではないかというふうに言うですよね。ですから僕はやはり質問は北海道という地域で、あるいはその村の地域でどう自分達が作ったものを消費していくかと。そこから始めて、例えば小出さんのとこでチーズが成功したと、おそらく自分達が食べておいしいければ親戚とか友達に食べさせて、また旨く行けば農協なんかで大きく生産してある地域で又消費する。北海道は550万の人口がいるわけですから、そういう形での自分が食べて売る。そしてそれを個人でやっていけない所は集団でやっていく。集団の力でそういう取り組みがやはり大事ではないかと思います。

**司会**

どうもありがとうございました。まだ質問がありますので質問を続けさせていただきます。吉田農場の井澤さんから小出さんへということで「規模拡大酪農から風土に生かされた酪農へ転換した大きな理由は何だったのでしょうか。そしてそれはだれでも出来る事でしょうか。」ということで、小出さんお願いします。

**小出**

その質問にたいしては、私達が入植した当時は規模拡大に燃えてまして、生産性の向上という周りからの普及所とか農協とかから言われましてやっていたんです。けれども技術的不足もありましたけれども、その規模拡大とか生産性の向上に対してやるエネルギーは莫大なものですよね。それに伴ういろいろな複雑な構造になってくるんですよ。その例えば搾るのに配合やって、配合やっても維持出来ないから又違うエサをやったりとかしてかなり複雑になってきます。複雑になってくるほどいろんな仕事が増えてくるんですよね。そのいろんな仕事が増えるから、余計な仕事が増えるから又それに伴う労力をかけなけりゃいけない。それが現状なんですね。そういう思いを私と家族共々にやった結果これはうまくないということで、やっぱり自然を受け入れるということが難しいことなんですね。ただ自然に生かされて、その例えば牛であれば牛の仕事は牛がすると、人間の仕事は人間がすると。今その企業的酪農は人間が全てを負っているんですね。例えば、草を、夏場でも草を刈ってサイレージ化して、そのサイレージ化したやつを夏場に牛にやる。その分だけやはり労力が掛かる。それを牛がやれば何も牛が行って畑で草を摘んで牛乳に変えてくれるし、その分だけ人間が携わることがなく十分ゆとりが出来る。そうやってその知らず知らずのうちに生産性の向上とか規模拡大によって、人間がかき回されて来たように思えるんです。それからの妥協とか、その風土に生かされたそれなりのお互いに牛なら牛がそれを働くというような、そっちの方向に持って行けばもう少しリラックスした農業がやれるかと思うのです。それには、ある程度の限度ていうものがあると思いますね。自然界に対しては均衡とか調整とかそういう事が自然界にはありますから。その限度がある事に対し消費者の人の理解と支えがあれば、そこに農民と消費者の接点が生まれてくると僕は思うのです。

**司会**

どうもありがとうございました。以上で会場の皆様からお受けいたしました質問は終わりとしますが、だいたい今の質問の中に今日のテーマが入っていたと思います。それでは若干時間がありますので、農業というのは本来自然を破壊して水田とか畑草地を作って成り立つもので、環境保全とは元々矛盾する。そういう意見もあるかと思いますし、また逆に農業というのは農業の生態系で循環するのだからそうではないといういろいろな意見もあるでしょう。いろいろ今環境との問題がでていますのでその辺につきまして、高畑先生にまずご意見をお願いします。

**高畑**

自然を利用した生産は確かにそこから経済性を追求する生産性の向上という側面と、それと環境保全自然からやすらぎを得るといったような経済では押し計れないような側面と、その二つの矛盾の元で考えていかなければいけないと思うわけです。こうあるべきだというようなことでは、今後経済一辺倒でなくて、豊かな文化を求めてというところに目的を置こうというとこでは一致するわけですけれども。それじゃどうやってということになりますと、先ほどからいろいろ議論がでましたように大変難しい問題になってくるわけです。これはまあ生産者の方の人達重視の農業、自然を生かした農業といったようなものが先か、消費者の食文化を、本来あるべき豊かな食文化を求める、といったようなものが先かといったようなものではなくて、まさにそれが両方合わさった所に展望されるわけですけれども。まあ一つの国民運動とでも申しましょうか、先ほどどうやってというところで問題提起もされましたけれども、一つやれる所からやると、自分の周りからやる。それか最とも大きな運動論として訴えるとかいろんなやり方があるかと思うんですけれども。まあ大変抽象的ですけれど、自分でやれる所からそれぞれやっていくということぐらいしか今申し上げられないんですけれども。その環境保全をそれから生産力の向上といったような経済的との矛盾は、そういう一つ身近な所から少しでも変えて行こうという運動になろうかと思います。

**司会**

どうもありがとうございました。最近持続的農業とか環境保全とかということで、環境問題が重視されてますけれど、一方、必ず国の政策とか行政の中では生産性のさらなる向上ということがそれに付いて回っているわけです。これは非常に両立するのが難しい問題ではないかと思っていますけれど、これについての考え方をちょっ

とご意見を伺いたいと思います。坂野さんどうですか。

**坂野**

生産性の問題と自然環境、私は必ずしも矛盾してないと思っているんです。例えば、糞尿。十分腐熟した糞尿を使えば、肥料は50％節約出来るというふうな調査結果がありますから、農業のやり方次第で選択する農法の問題が一つあるのではないかと思うのですね。それから、これは直接の答になりませんが、総論賛成各論どうもというやつなんですね。どうも人間の行動の中にはついて回っている。例えば食糧自給率、下がった下がったと言いますけれど、カロリー自給率で昭和40年代は70％、現在40何％になっているんですが、その低下の⅓は米を食べなくなったことにある、というふうな問題も一つ指摘されていますね。それから肉について言いますと、かっては非常に粗飼料主体の生産技術が検討されましたけれども、最近皆さん所得が上がっておいしい肉おいしい肉というので、サシ嗜好になった。穀物自給率を食物穀物でみると結構高いんですが、輸入される餌の穀物を入れて考えるとガクンと下がってしまう。なぜかというと、サシ嗜好の皆さんの消費に合わせて霜降り肉をつくるために、どんどん穀物を食わせる。まあ、牛乳なんかも最近は円高で輸入飼料が安くなったこともありますが、どうも配合飼料が主体の飼育が広がった。いずれもどうも本音と建て前の食い違いの一つの現われみたいな感じで、消費者についてもあるし、生産者についてもある。この辺の人間の気持ちの問題の整理が一つなければ、なかなか問題が解決しないんじゃないかという感じを実は今もっています。

**司会**

それに関連してこの前ガットの合意ということもありますけれど、今世界的に貿易の自由化というのは、工業製品と同じように農産物の貿易も自由化するのが一番正しいというような形で、この前合意されたのですけれど。私は普段からそうではない、使い捨ての工業製品と循環する農業と一緒に考えるのは問題だと思っているのですけれど。むしろ、そういう世界に適した農業を維持して発展していく方向で協力し合うのが大事ではないかと思うのです。その辺、特に都会で住んでおられる加藤さんはどんな形でうけとめておられますか。

**加藤**

小説書いたり読んだりしている生活が中心なので余り現実の農業に詳しくないのですが、実際私自身が毎日買い物に行って肉とか乳製品を買うわけですよね。その時に私自身の目安としては外国の物は買いません。それはいろいろの理由で。少し前に農業新聞に頼まれてエッセイを書いた時には、そんなに自由化ということに全部反対しなくても良いのではないかと書いたんですが。それは別に北海道の農業のことを意識したのではないのですが、余りにも農業上の創意工夫というのが日本でなされていなくて、一律に同じような形態でずっと来ていると感じていたからです。むしろ外国からの輸入によって少し危機意識を刺激して創造的農業とか、面白い農業とか自分でやって楽しい農業をやってみようという人が出て来るんじゃないかなというように思ったのです。自由化も悪い点ばかりではない、と書いたのですが、それはそれとして、自分自身で買う時はやはり外国の生産物には手を出さないんです。どうしてかというと、やっぱりその土地に馴染んだ物というのは、すごくおいしいと感じるんです。現に北海道のコーン、馬鈴薯、牛乳、バターなどはおいしいです。もちろん外国から来た物のポストハーベストという問題もあります。そんな事考えると、やっぱり不安がない国産のものを食べたい、いくら日本は農薬たくさん使っているといってもですね、かなり以前に比べたら低農薬になっているはずですし、情報をえやすいのは国産の物だろうということで、外国の物は野菜にしろ肉にしろほとんど食べません。そういうことを皆が個人生活の中できっちり考えていくきっかけを作れれば、そんなに自由化を恐れる事はないんじゃないかと思います。

**司会**

いろいろ幅広い話題が話されて来ましたけれど、それでは、これからの草地研究はどうあるべきか、という問題も若干話したいわけです。その前に、今までの話しを集約するような形で、農業というか草地農業と文化、自然環境というものはどういうふうに考えたらよいか、いろいろご意見も出ましたけれど、島本先生に最後にちょっと総括していただきたいと思います。

**島本**

今日の午後からずいぶんお話しを聞いて来たわけですけれど、大部そのお話しする方の視点が違っていまして、非常に幅広いところをお話しをして、それを１～２分でまとめよと言われてもかなり難しい所である事は、多分皆さんお聞きになっていてそう思うと思います。今日北海道草地研究会30周年記念をしてここに大きな、ある意味では非常に大きなタイトル「北海道の草地と文化、豊

かな文化をはぐむ土地を目指して」ということをテーマにシンポジュウムを、お話しをしていただいたわけですけど。加藤さんが一番最初に草地とはという定義から、そうしますと文化とは何かというような、そういうような基本的な所がなかなか定義しずらくて、なかなかこの北海道の草地と文化というようなことをまとめるという事は難しいわけですけれど。いずれにしても、今その農業という事を考えた場合にこれは世界的な傾向でありますが、いわゆる最近あまりそういうことを騒がれていませんが、いわゆる「IO比」、要するにそういう農業から我々は食糧を得るわけですが。その際、それに投下するエネルギー、幾ら投下して幾らOUT PUTを得られるかという、そういう農業の基本でありますが、そういうものがほとんどの作物で、日本での話しですが、全部1以下になっている事は皆さんご存知と思います。その中で、やっぱり草地農業というのはこのまだ「IO比」がかなり高い。少なくても1以下にはなっていない。私はその辺萬田さんに聞かなければよくわからないんですけど。かなり草地農業で我々は食糧を持っている分には非常に大きな値を得ているはずであります。そのような我々人間の社会に残されているといいましょうか、人間に与えれれているそういう農業、我々はそれを非常に大事にしなければならないと、そのように私は思うわけです。

そういうような中で、今日お話しいただいた方が草地を基盤に考えた場合には、まず豊かな自然という事が一番の前提になっているんではないかと。そういう豊かな自然のもとに始めて豊かな草地がありまして、そこではそれを直接担っている農民が豊かな生活がなされていなければならない。豊かな生活、そこではあくまでも生産ということが基盤になっているわけでありますが、これから生産に加えてその草地でいろいろなもの、これは特に小出さんのお話し、ヨーロッパのお話しとか、加藤さんのそのハイジの生活と、そういうような、そのなかなか金銭では決裁できない。まあそういうような物の生産というものがそこであげられていて。そして、そこではやはり今加藤さんがお話しになられましたように、何か創造的なそして面白い、これはある意味では文化をはぐむという事に繋がるのではないかと思いますけれど。この北海道の草地でそういうものが、これから行われていくというような所、そういうような所を目指したこれからの試験研究といいうものを、我々は目指さなければならないのではというようなことで、私の聞いていてのサマリーにはなりませんけれど、そのような感じをしております。

**司会**

島本先生から草地研究の今後の方向にも若干触れていただきましたけれども。これからの草地研究はどうあるべきかということで、実はもう少し話しを進めようと思ていましたが、時計の方が段々迫って来ましたので、帯広畜産大学の福永先生に特にこの問題に絞って、これからの草地研究はどうあるべきかということでのまとめとご意見をお願いします。

**福永**

今日皆さんのお話しを聞いていて、草地農業というのは北海道に適しているんだなあ。まあその中にも農産物の自由化云々、または経営的規模拡大とかいろいろ問題がありますけれども。基本的にはやはり環境に、言葉としてはやさし自然環境に、適応したような草地農業というようなことが叫ばれています。いま、島本先生からお話しがありましたけれども、そういう事だけでなくして、そこに生産性となりますと、先ほど小出さんがお話したように、人為的力だけでなく経済的負担も非常に大きくなる事。まあそういうような事を考え合わせますと、やはりその北海道の環境に合った、即ち、生態系からみた物質の循環系ということを有効に活用出来るような、我々の分野からしますと、研究の分野ではそのような所に力を入れていく必要がある。例えば、先ほど坂野さんの方から話がありましたけれども、堆厩肥の問題ですね。まあこういうものも一つの景観と、またそれを有効利用というような観点からしましても研究する必要があるのではないかと。それを生かすという形ではやはり北海道の環境に適した中での無理をしない、そういう中でやさしい草地の経営というようなこと、そのためにはやはり有効にその生産された物を活用すること、そういう面の研究も必要ではないかなと今日の話しを聞いて感じております。

**司会**

どうもありがとうがざいました。時間の方がだいたい予定していた時刻になって来ましたので討論の方はこれで終わりにしまして、私のほうで最後にまとめということにします。

日本の国は世界の一流工業国家となって、それだけに市場原理の基に全てが生産効率が厳しく追求されてきました。その結果、畜産も例外ではなく、中小家畜では早くから濃厚飼料に依存する規模拡大が進みました。そういう面で加工型畜産という形で農家戸数の減少とか、また企業的経営という展開が急速に進みました。北海道の

畜産は土地基盤に恵まれているという事で、従来はのんびりしている所があったんですが、最近は土地利用型畜産がいつのまにか少なくなって、次第に濃厚飼料依存率が高まるとか、また放牧が消えてしまうとか、また家畜の糞尿の公害が問題になってきています。畜産というのは元々土と草、家畜と循環していく農業ですが、最近効率を求めて大型化するために循環がうまく行かない、また環境保全がうまく行かないというような形になっているのではないかと思います。そういう面で世界的に農業だけではなく、全てが価値観の転換というような時代に入っております。20世紀文明が、先ほども話しがありましたけれど、人類全体に大変な利便性をもたらした。交通だとか情報だとかいろいろな面でありますけれど。逆にまた同時にといいますか、公害または大気の汚染とかいう負の遺産をももたらしたのも事実ではないかと思っています。それを21世紀にどうして取り戻すかが課題になると思います。そういう面で、文化は農耕から始まるという話しもありますが、いままで文明の利便性でこの20世紀が行われていたのですけれど、これからは文明ではなく文化の時代になるものと思われます。文化というものは絶対に工業とか工場からは生まれないと。農業だとか農村、土や生命を相手に循環する再生産していく、そういう農業の所でしか生まれないといわれてますけど、まさにこれからはそういう時代に入っていくと思います。そういう面で私達草地研究会も北海道の風土に適した草地畜産の構築、または環境を未然に防止するという技術とか、または持続的農業を阻害するような要因の追求、そういう形の研究がこれから求めれているのではないかと思っています。

以上をもちまして今日のシンポジュウムを終わりにさせていただきます。パネラーの皆様どうも有り難うございました。会場の皆様どうも有り難うございました。

**落合**

それではこれで北海道草地研究会30周年の記念シンポジュウムを終わります。